

符江

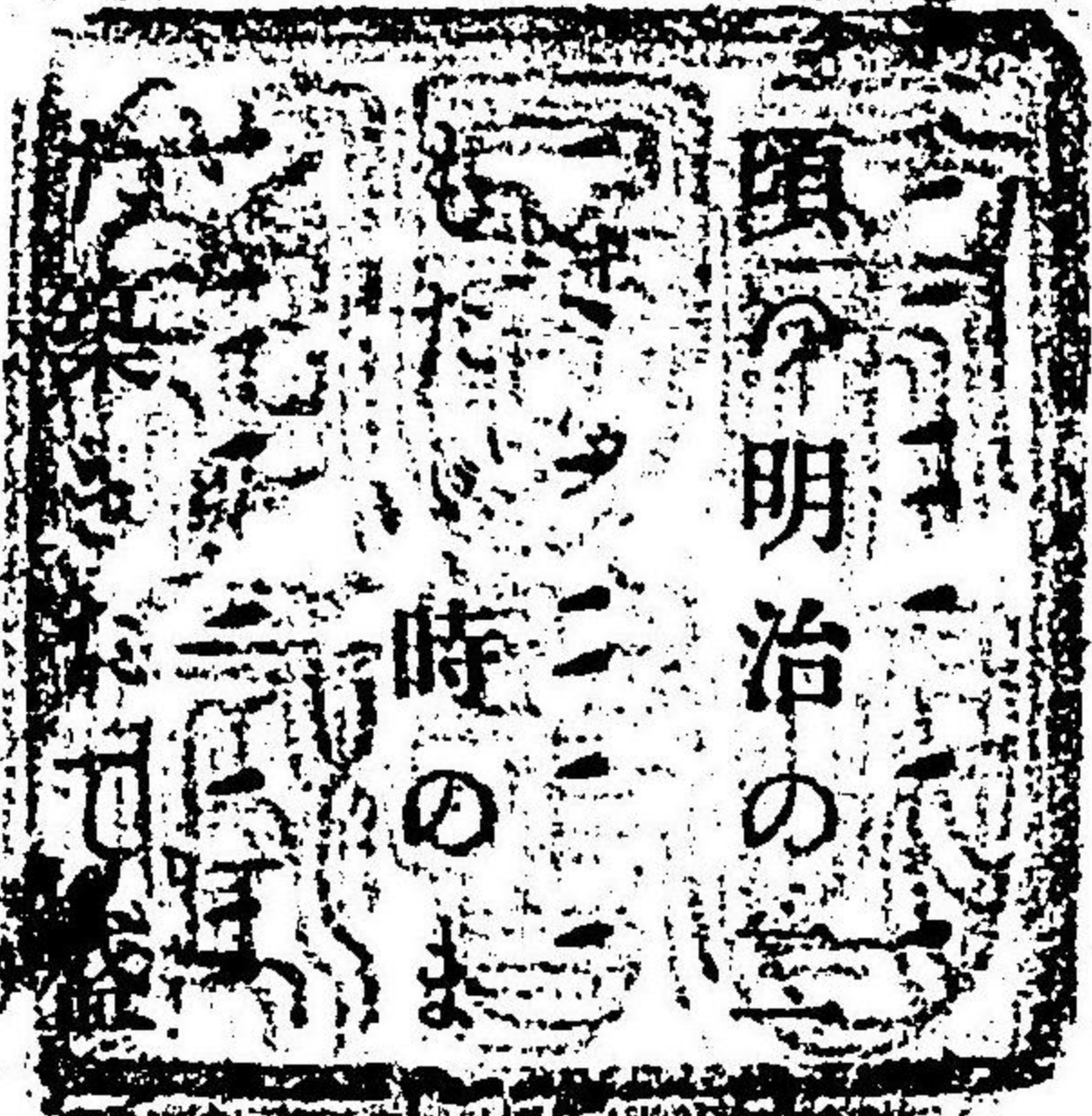
757

廣雅釋詁卷之三

256

275

慶應下御製 平壤城



頃明治の

十七長月なかば諸軍勢大同江

明治 44.10.4 急肉交

打渡り平壤城に近づけば砲壘あま

子奉軍殺字軍や其外諸軍すさまなく

隊を亂さず守りしを我忠勇のつゆものゆ砲烟彈雨

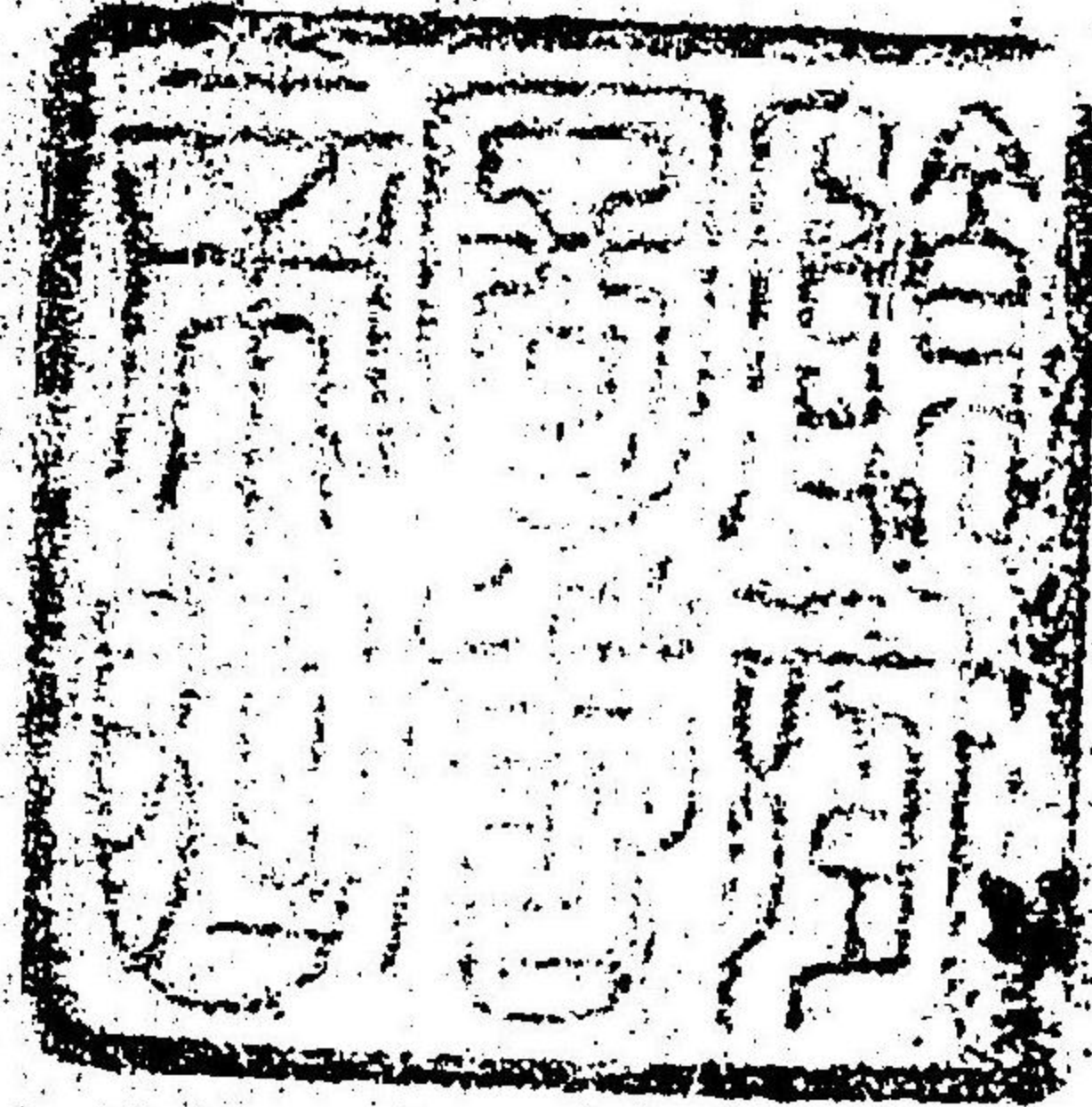
も物とせず「進め」といさみゆき。面もふら

ず攻めたつるあまたの敵も防ぎかね秋の木の葉と

平壤城

平壤





明治  
10.4  
交内

皇后陛下御製 平壤城

クセキ  
ツヨク

頃ハ明治の二

十七長月なかば諸軍勢大同江

の明治  
急10.4  
流内交

もたい時のま

に打渡り平壤城に近づけば砲壘あま

た築きたて

盤字奉軍毅字軍や其外諸軍すさまなく

隊を亂さず守りしを我忠勇のつゆものゆ砲烟彈雨

も物とせず進めくといさみゆき。面もふら

ず攻めたつるあまたの敵も防ぎかれ秋の木の葉と

平壤城

みだれたち煙のうちに散りうせぬとりでの上に日  
 の御旗たかくかゝげてすめらぎの御代萬歳とうた  
 ふなり御代萬せいとうたふなり

其文の妙趣味ふべく、其の調の  
 神韵抑すべく、かくして該曲は  
 現時の大隆盛を來し、忽ち該木  
 に関する一種の不便を感じしむ  
 るに至れり。蓋し時代は活字の  
 世の中に於て又旅行の世中、而  
 して該本は皆尅大高價なる寫本  
 木版又は石版摺なれば也。こゝ  
 に其不便を補はんか爲、同志不  
 才自ら顧るの遠なく、世に卒先  
 して輕量安價比類なき活版該本  
 を編纂せり。該曲界の爲、裨益  
 する處あらば幸甚也

明治四十三年新涼九月 編輯同人誌



ら身の唐土の名にしおふ女工の昔を思ひ出づる月の入さや西の  
 海波路遙に來し方の身の唐人の年を経て爰に吳服の里迄も身に  
 知れたる名所かな下歌 是もかしこき御代の爲送り迎へし機物の  
 大和にも織る唐衣の營を上歌 今敷島の道かけて言の葉草の花  
 迄も顯ゆし衣の色そへて心を碎く紫きの袖も妙なるかざしかな  
 「扱も我此松原にきて見ればやことなき女性二人あり。  
 一人の機を織今一人の糸を取引互に常の里人との見え給はずそ  
 も方々はいかなる人ぞツレ二人恥かしや里離れなる松陰のうしほも

曇る夕月の影にまぎれて浦浪の聲にたぐへて機物の音聞えじと  
 思ひしに知られけるかや恥かしや 「何をか包給ふらん其身の  
 常の里人ならで此松陰に隠れ居て機織給ふ不審也いかさま名  
 のり給ふべしシテ 「是の應神天皇の御宇にめてたき御衣を織そめ  
 し吳織漢織と申し二人の者今又めで度御代なれば現にあらわれ  
 來りたりワキ成 「ふしぎの事を聞ものかな夫の昔の君が代に唐國よ  
 りも渡されし綾織二人の人なるが今現在に顯れ給ふ何といひ  
 たる事やらんシテ 「早くも心得給ふものかな先此里を吳服の里と。  
 吳服

名付そめしも何故ぞ我此所にありし故なり  
又漢織との機物の糸を取り引く工ゆゑ綾の紋をもなす故に漢織との申すなり

「吳織との機物の糸引く木をばくれはといへばくれは取手によそへつゝ吳織との申なり」

「されば二人の名によせて」  
「吳織綾との申傳へたり」

然れば我らの唐人なれば倭詞の知れども

「吳織あやに戀しくありしかば二村山とよみし歌も二人を思ふ心なり」

御目の程のさすがげに

名にしおふ都人の所から唐人と我らを御覽せらるゝゆげにかし

こしやよき君に仕ふる人かありがたや  
夫綾といつげ

唐土吳郡の地より織初めて女工の長き營なり  
然るに神功皇后

三韓を従へ給ひしより和國異朝の道ひろく人の國迄なびく世

の我日の本の長閑なる御代の光のあまねくて國富み民豊かなり

「東南雲收まりて 西北に風靜なり 應神天皇の御宇かとよ吳

國の勅使此國に初て來り給ひしに綾め糸めの女婦をそへ萬里の

滄波を凌ぎ來て西日影残りなく吳服の里にやすらひ連日になつ

る機物の錦をおりく綾の御衣を奉る勅使奏覽ありしかば觀

吳服

感殊に甚しそれより名づけつゝ、三 袞龍の御衣の紋いとなみも名高  
二 き山鳩色をうつつしつゝ、一 氣色だつなり雲鳥の羽ぶさをたゝむ綾と  
地小 なすいともかしこかりけり、然れば萬代に絶えせぬ御調なる  
一 べしと、御定めありしより吳服の文字を和けて吳織漢織と名づ  
一 けさせ給へば年を迎へて色をなす綾の錦の唐衣返すぐも君が  
袖中 袖ふるきためしをひく糸のかゝる御代ぞめでたき、是につけ  
一 ても此君のくくめてきたためし有明のよすがら機を織り給へ  
三人上 「いざぐさらば機物の錦を織りて我君の御調に供へ申さん」

地上 「げにや御調の數々に錦の色ゆ、二人 小車の、同下 丑みつの時すぢ、中 曉  
一 の空を待給へ姿をかへて來らんさらばといひて吳織漢織のかへ  
一 れども鶏ゆまだ鳴かずや夜長なりと待ち給へ夜長くとても待ち  
給へ 給へ、上歌 嬉しきかなやいざさらば、後 此松影に旅居して風も  
三 嘯く寅の時神の告をも待て見ん、出 君が代ゆ天の羽衣稀  
一 にきてなづとも盡ぬ岩ほならなん千代に八千代を松の葉の散り  
一 失せずして色ゆ猶正木の葛長き代の例に引や綾の紋曇らざりけ  
一 る時とかや、地上 「此君の畏き世ぞと夕浪に聲立添ふる機の音」

吳服

四



(八〇五)

「錦を織る機物の内に相思の字を顯ゆし衣うつ礎の上に怨別の聲。  
 松の風又の磯うつ浪の音」しきりに暇なき機物の取るや吳  
 服の手繰の糸「我取ゆあやゆ」踏木の足音 「きりはたりち  
 よふ」きりはたりちやうくと「悪魔も恐るゝ聲なれやげ  
 に織姫のかざしの袖」打上思ひ出でたり織女の「偶あへる旅  
 人の夢の精靈妙童菩薩も影向なりたる夜もすがら」寶の綾  
 を織りたてゝ我君に捧げ物御代の例の二人の織姫吳服漢織の  
 取々に吳服漢織の取々の御調物供ふる御代こそめでたけれ

二番目

八

島

三月

前シテ流 翁 ツレ流 夫  
 ワキ翁 後シテ源 義經

大第ヨハクキ

「月も南の海原や」八島の浦を尋ねん 「是の都方より出た  
 る僧にては我未だ四國を見ずは程に。此度思ひ立ち西國行脚と志  
 しは」春霞うきたつ浪の沖つ舟「入日の雲も影そひてそ  
 なたの空と行く程に遙々なりし舟路へて八島の浦につきにけり  
 急ぎは程に是のけや讃岐の國八島の浦に着ては日の暮

れてはへば是なる鹽屋に立寄り。一夜を明かさばやと思ひは  
 面白や月海上にうかんでの波濤野火に似たり 「漁翁夜西岸に

(九〇五)

「面白や月海上にうかんでの波濤野火に似たり」漁翁夜西岸に

八島

そふて宿す。あかつき湘水を汲んで楚竹をたくも今にしられて  
蘆火のかげほの見えそむる物す。さよ。月の出潮の沖つ波

霞の小舟こがれきて。「あまの呼び聲。里近し。」一葉萬里の舟

の道唯一帆の風に任す。「夕べの空の雲の浪。月の行衛に立ち

消えて霞にうかむ松原の蔭のみどりにうつろひて海岸をこことも

不知火の筑紫の海にやつくらん。爰八島の浦傳ひ海士の

家居も數々に。釣のいとまも波の上。霞渡りて沖ゆくや

あまの小舟のほのぐと見えて残る夕暮浦風までも長閑なる春

「先々鹽屋に歸り休まうするにては  
や心を誘ふらん」

「鹽屋の主の歸りては立越え宿を借らばやと思ひはにかに是なる

鹽屋の内へ案内申は。誰にて渡りはぞ。諸國一見の僧にて

は一夜の宿を御かしはへ。暫く御待ちはへ主に其由申はべし。

いかに申は。諸國一見のお僧の。一夜のお宿と仰せは。易き程の

御事なれ共餘りに見苦しき程に。お宿の叶ふまじきよし申はへ

「お宿の事を申てはへば餘りに見苦しき程に。叶ふまじきよし仰

せは。いやく見苦しき程に。殊に是の都方の者に

て。此浦始めて一見の事にてひが日の暮てひへば平に一夜と重て

御申ひへ 「心得申ひ唯今の由申てひへば旅人の都の人にて御

入りひが日の暮てひへば平に一夜と重て仰せひ 「何旅人の都

の人と申すか 「さんひ 「げに痛のしき御事かなさらばお宿

をかし申さん 「本よりすみかも蘆の屋の 「唯草枕と思召せ

「しかも今宵の照りもせず 「曇りも果てぬ春の夜の 朧月夜に

しく物もなき海士の苦 八島にたてる高松の苔のむしるの痛

のしや 扱なぐさみの浦の名の 群れぬる田鶴を御覽せ

合戦の  
中央地

よなどが雲井に歸らざらん旅人の古郷も都ときけばなつかしや  
我らも本つとてやがて涙にむせびけり  
「いかに申ひ何

とやらん似合のぬ所望にてひへ共古へ此所の源平の合戦のちま

たと承りてひ夜もすがら語つて御聞かせひへ 「易き間の事語

つて聞かせ申ひべしいで其頃の元暦元年三月十八日の事なりし

に平家の海の面一町ばかりに船をうかめ源氏の此汀にうち出で

給ふ大將軍の御いてたちへの赤地の錦の直垂に紫裾濃の御着背

長鎧ふんばり鞍笠につゝ立ちあがり一院の御使源氏の大將檢非

入 三

違使五位の尉源の義經と名のり給ひし御骨がらあつばれ大將や  
 と見えし今のやうに思ひ出られては  
 葉戦ひ事終り兵船一艘漕ぎよせて波うちぎぬにおりたつて陸の  
 敵をまぢかけしに  
 「源氏の方にもつゞく兵五十騎ばかり中に

も三保の谷の四郎と名のつて眞先かけて見えし處に  
 方にも悪七兵衛景清と名のり三保の谷をめぐり戦ひしに  
 「彼

の三保の谷の其時に太刀うちおつて力なくすこし汀に引退きし  
 に  
 「景清追つかけ三保の谷が  
 「きたる兜のしころをつかんで

うしろへひけば三保の谷も  
 「身を遁れんと前へひく  
 互に  
 えいやと  
 「ひく方に  
 鉢附の板よりひきちぎつて左右へく  
 わつとぞのきにける是を御覽じて判官御馬を汀にうちよせ給へ  
 は佐藤繼信能登殿の矢先にかつて馬より下にどうと落つれば  
 舟にの菊王もうたれければ共に哀とおぼしけるか舟の沖へ陸の  
 陣に相引きにひく汐のあとが関の聲たえて磯の浪松風ばかりの  
 音さみしくぞなりにける  
 「ふしぎなりとよ海士人の餘り委し  
 き物語其名を名のり給へや  
 「我名を何と夕浪のひくや夜汐も

朝倉や木の丸殿にあらばこそ名のりをしてもゆかまし  
や言葉をさくからに其名床しき老人の  
「昔を語る小忌衣」

「頃しも今夕 春の夜の 潮の落つる曉ならば修羅の時にな  
るべし其時の我名や名のらんとひ名のらず共名のるとも義經  
の浮世の夢ばし給ふなよ」  
「ふしぎや今の老人の」

其名を尋ねし答にも義經の世の夢心とまゝてまてと聞えつる  
聲も更ゆく浦風の 松が根枕そばだて、思ひをのぶる苦む  
しる重て夢をまち居たり  
「落花枝にかへらず破鏡ふた

たび照らさず然れどもなほ妄執の噴毒とて鬼神魂魄の境界にか  
へり我と此身を苦しめて修羅のちまたによりくる波の淺からざ  
りし業因かな「ふしぎやな早曉にもなるやらんと思ふ寢覺の  
枕より甲冑を帶し見え給ふの若し判官にてましますか」  
「われ

義經が幽靈なるが噴毒にひかる、妄執にて猶西海の浪にたよ  
ひ生死の海に沈淪せり  
「愚やな心からこそ生死の海とも見ゆ  
れ真如の月の 春の夜なれど曇りなき心もすめる今宵の空  
「昔を今に思ひ出づる 舟と陸との合戦の道 所からとて

「忘れえぬ 武士の八島に射るや槻弓の 本の身ながら又  
 爰に弓箭の道ゆ迷ゆぬに迷ひけるぞや生死の海山を離れやらで  
 歸る八島の恨めしやとにかくに執心の残りの海の深き夜に夢物  
 語申すなり 忘れぬ物を閻浮の故郷に去つて久しき年  
 波の夜の夢路に通ひきて修羅道の有様顯すなり \*思ひぞ出る  
 昔の春月も今宵にさへかえり 本の渚ゆなれや源平互に矢  
 先を揃へ船をくみ駒を並べてうち入れく足なみにくつばみを  
 ひたして攻め戦ふ 其時何とかしたりけん判官弓をとり落し。

終り迄

（一）

波にゆられて流れしに 其折しもひく汐にて遙かに遠く流

れゆくを 敵に弓をとられじと駒を波間に泳がせて敵船近く

なりし程に 敵の是を見しよりも船をよせ熊手にかけて既に

あやうく見え給ひしに され共熊手を切拂ひ終に弓を取返し。

元の渚にうちあがれば 其時兼房申すやう口惜しの御ふるま

ひやな渡邊にて景時が申しも是にてこそひへたとひ千金をのべ

たる御弓なりとも御命に代へ給ふべきかと涙を流し申しけれ

ば判官是を聞召しいやとよ弓を惜むにあらず 義経源平に弓

八

六

箭をとつて私なし然れども佳名の未た半ならずされば此弓を敵  
 にとられ義經の小兵なりといわれんや無念の次第なるべしよし  
 それ故にうたれんや力なし義經が運の極めと思ふべしさらすの  
 敵に渡さじとて浪にひかる、弓取の名の末代にあらずやと語り  
 給へば兼房さて其外の人迄も皆感涙を流しけり「智者のまよと  
 ぬす 勇者の恐れずのやたけ心の梓弓敵にの取り傳へじと惜む  
 の名のため惜まぬの一命なれば身をすてこそ後記にも佳名を  
 とむべき弓筆の跡なるべけれ 又修羅道の関の聲 「矢さ

難任送

けびの音震動せり けふの修羅の敵のたそなに能登の守教經  
 とやあら物々しや手なみゆしりぬ思ひぞ出る檀の浦の 其船  
 軍今ゆはやく 閻浮に歸る生死の海山一同に震動して船より  
 の関の聲 「陸にの波の楯 一月にしらむゆ 劔の光 潮  
 にうつるゆ 「兜の星の影 水や空そらゆくも又雲の波のう  
 ちあひさしちがふる船軍のかげひき浮き沈むとせし程に春の夜  
 の波より明けて敵と見えしや群れぬる鷗関の聲と聞えしや浦風  
 なりけり高松の浦風なりけり高松の朝嵐とぞなりにける

四番目

葛

城

十一月

前シテ里

ワキ山

伏 女  
後シテ 葛城の跡

大  
ツヨク

神の昔の跡とめて

葛城山に参らん

是の出羽の羽黒山

より出たる山伏にては我此度大峯葛城に参らばやと存は

懸の袖の朝霜起臥の 岩根の枕松が根の宿りもしげき嶺つ

き山又山を分越えて行けば程なく大和路や葛城山に着にけり

急ぎは程に程なく葛城山に着てはあら笑止や又雪の

ふり来りては是なる木陰に立寄らばやと思ひは

れなる山伏の何方へ御通りはぞ

此方の事にてはか御身のい



かなる人やらん

女

「是の此葛城山に住む女にてゆ。柴とる道の歸

るさに踏みなれたる通ひ路をさへ雪の吹雪にかきくれて家路も

ワキ

さだかにわきまへぬにましてや知らぬ旅人の末いづくにか雪の

山路に迷ひ給ふの痛のしや見苦しくゆへ共わらわが庵にて一夜

ワキ

を御あかしゆへ「うれしくも仰せゆものかな。今に始めぬ此山

の度々峯入りして通ひ馴れたる山路なれ共今の吹雪に前後を忘

ワキ

してゆに御志有難ふこそゆへ借御宿のいづくぞや

女

「此そゆづ

たひのあなたなる谷の下庵見ぐるしく共程ふる雪の晴間まで御

身を休め給ふべし

ワキ

「さらば御供申さんと夕べの山の常陰より

「さらでもさかしきその傳ひを」道しるべする山人の笠の重

ワキ

し吳山の雪沓の香ばし楚地の花

上歌

肩上の笠にゆ〜無影の

月をかたむけ擔頭の柴にゆ不香の花を手折つゝ歸る姿や山人の

笠も薪もろづもれて雪こそくだれ谷の道をたどり〜歸りきて

柴の庵に着にけり〜

ワキ

「あら嬉しやゆ。今の雪に前後を忘し

てゆ處に。今宵のお宿返すくも有難うこそゆへ」餘りに夜さ

むにゆ程に是なる標をとき亂し火にたきてあて參らせゆべし

ワキ

「あら面白や標とゆ。此木の名にてゆか。」「うたてやな此葛城山の

女

雪の中にゆひ集めたる木々の梢を標としろしめされぬの御心な

きようにこそゆへ

ワキ

「あら面白や扱ゆ此標といふ木の葛城山に

由緒ある木にてゆよのう

女

「申すにや及ぶ古き歌の言葉ぞかし。

標をゆひたる葛なるを。此葛城山の名によせたり。これ大和舞の歌

終り迄

といへり

ワキ

「げに古き大和舞の歌の昔を思出の

女

雪も

ワキ

「ふるものを

上歌

標ゆふ葛城山にふる雪の

間なく

時なく思はゆるかなと詠む歌の言の葉そへて大和舞の袖の雪も

終り迄

ふるき世のよそにのみ見し白雲や高間山の嶺の柴屋の夕煙松が

枝そへてたかうよ松が枝そへてたかうよ。葛城や木の間

に光

る稲妻ゆ山伏のうつ火かそこを見ればにや世の中の電光朝露石

の火の光の間ぞと思へ唯我身の歎きをも取りそへて思ひ眞柴を

たかうよ。捨人の苔の衣の色深く。法の心の墨染の袖もさな

がら白妙の雪にや色をそみかくたの篠懸もさえまさる標を集め

柴をたき寒風を防ぐ葛城の山伏の名にしおふ片敷く袖の枕して

身を休め給へや御身を休め給へや。」「あら嬉しや篠懸を乾して

身

を

休

め

給

へ

や

山伏の  
名とあり

葛城

三

ひぞや急ぎ後夜の勤を始めばやと思ひ女 「御勤との有難や我

になやめる心あり御勤のついでに祈り加持して賜りワキ へ 「そ

も御身になやむ事ありと何といひたる事やらん女 「さなきだ

に女の五障の罪深きに法のとがめの咒咀を負ひ此山の名にしお

ふ葛葛にて身をいましめて猶三熱の苦しみあり上 此身を助けてた

び給へ 「そも神ならで三熱の苦しみといふ事あるべきか女

「恥かしながら古への法の岩橋かけざりし其とがめとて明王のさ

つづくにて身をいましめて今に苦しみたえぬ身なり 「是のふしワキ

ぎの御事かな扱ゆ昔の葛城の神の苦しみつきがたき 「石の

つの神躰として 「葛葛のみかゝる岩ほの 「撫つともつきじ

葛の葉 「はひひろりて 「露に置かれ 霜に責められ起臥

の立居も重き磐戸の内 明くるわびしき葛城の神に五衰の苦

しみあり祈り加持してたび給へと岩橋の末たえて神隠れにぞ成

にける 「岩橋の苔の衣の袖そへて 法の蕙のこ

とゆに法味をなしてよもすがらかな葛城の神の夜ヨル の行ひ聲

澄て一心敬禮 出葛城 上 「我葛城のよもすがら和光の影にあらわれて

葛城

四

五衰の眠を無上正覺の月にさまし法性眞如の寶の山に法味にひ  
 かれて來りたりよくく勤めおのしませ打上ふしぎやな峨々た  
 る山の常陰より女躰の神とおぼしくて玉の簪玉葛のなほかけそ  
 へて葛葛のはひまとゆる、小忌衣ヨロコヒ是見給へや明王のさつく  
 つかゝる身をいまして  
 「猶三熱の神ヨロコヒ」る 「年ふる雪や  
 標ゆふ 葛城山の岩橋のよるなれど月雪のさもいちじるき神  
 躰の見ぐるしき顔ばせの神姿の恥かしやよしや芳野の山かつ  
 らかけて通へや岩橋の高天の原は是なれや神樂歌はじめて大和

舞いざやかなでんヨロコヒふる雪の標ゆふ花の白和幣ヨロコヒ高天の原  
 の磐戸のまひく天の香具山も向ひに見えたり月白く雪白く  
 いづれも白妙のけしきなれどもなにおふ葛城の神の顔がたちお  
 もなやおもはゆや恥かしや淺ましやあさまにもなりぬへしあけ  
 めさきにと葛城のあけぬさきにと葛城のよるの磐戸にぞ入り給  
 ふ磐戸の内に入り給ふ

九番習  
五番目  
略協能

當

麻

二月

前シテ  
ワツ  
キレテ  
老  
化  
族

尼  
尼  
僧

後シテ  
中  
將  
姫

大第ヨハキ  
ヨハキ  
「教へられし法の門くひらくる道に出てうよ」  
「是の念佛

の行者にてい。我此度三熊野に参り下向道に趣てい。又是より大和

路にかゝり當麻の御寺に参らばやと思ひい。程もなく歸り紀

の路の關越えてく。こや三熊野の岩田川波もちるなり朝日影

夜晝わかぬ心ちして雲もそなたに遠かりし。上山の麓なる當麻

の寺に着にけり。二念彌陀佛即滅無量罪とも説れたり

(三三五)  
ツレ  
「八萬諸聖教皆是阿彌陀ともありげにい」  
「釋迦の遣り」  
「彌陀

當  
麻

の導く一筋に。心ゆるすな南無阿彌陀佛と。唱ふれば佛も我もなかりけり。南無阿彌陀佛の聲ばかり。涼しき道の。頼もしや。濁りにしまぬ蓮の糸濁りにしまぬ蓮の糸の五色にいかで染みぬらん。有難や諸佛の誓ひ様々なれ共わきて超世の悲願とて迷ひの中にも殊に猶。五つの雲の晴れやらぬ雨夜の月の影をだにしらぬ心のゆくゑをや西へとばかり頼むらんげにや頼めば近き道を何遙々と思ふらん。末の世に迷ふ我が爲なれや。説き残す御法の是ぞ一聲の。彌陀の教を頼まずの末

の法萬年々経るまでに餘經の法ゆもあらじたま。此生に浮まず又いつの世を松の戸の明くれば出て暮る。まで法の場にまじるなり御法の場にまじるなり。いかに是なる方々に尋申べき事の。何事にてゆぞ。是の當麻の御寺にてゆか。さんい當麻の御寺とも申し又當麻寺とも申ゆ。又是なる池の蓮の糸をす。ぎて清めし其故に染殿の井とも申すとかや。あれの當麻寺。是の染寺。又此池の染殿の色々様々所々の法の見佛聞法ありともそれをもいさや白糸の唯一筋ぞ一心不

亂に南無阿彌陀佛 げに有難き人の言葉即ち是こそ彌陀一教

なれ扱又是なる花櫻常の色にゆ變りつゝ是も故ある寶樹と見えたり げによく御覽じわけられたりあれこそ蓮の糸をそめて

「掛けてほされし櫻木の花も心のある故に蓮の色に咲く共いへり

「なかくなるべし本よりも草木國土成佛の色香にそめる花心の

「法の潤ひ種そへて 濁にしまぬ蓮の糸を すゝぎて清めし

人の心の 「迷ひをほすゆ 緋櫻の色はへて掛し蓮の糸櫻

花の錦の經緯に雲の絶間に晴れ曇る雪も緑も紅も唯一聲

の誘ゆんや西吹秋の風ならん 猶々當麻の曼陀羅の謂

委しく御物語りゆへ 抑も此當麻の曼陀羅と申すゆ人皇四十

七代の帝廢帝天皇の御宇かとよ横佩の右大臣豐成と申し人

其御息女中將姫此山にこもり給ひつゝ 稱讚淨土經毎日讀誦し

給ひしが心中に誓ひ給ふやう願くゆ正身の彌陀來迎あつて我に

拜まれおのしませと一心不亂に觀念し給ふヨク然らずゆ畢命を

期として 此草庵を出じと誓て一向に念佛三昧の定に入給ふ

所の山陰の松ふく風も涼しくてさながら夏を忘れ水の音も絶々

當麻

三

に心耳をすます夜もすがら稱名觀念の床の上座禪圓月の窓の内、  
 寥々とする折節に一人の老尼の忽然と來りた、ずめり是のいか  
 なる人やらんと尋ねさせ給ひしに老尼答へて宣ひく誰とゆなど  
 や愚なり呼べばこそ來りたれと仰せられける程に中將姫のあき  
 れつ、シテ上「我の誰をか呼子鳥 たづきもしらぬ山中に聲立つる  
 事としての南無阿彌陀佛の唱へならて又他事もなきものをと答へ  
 させ給ひしにそれこそ我名なれ聲をしるべに來れりと宣へば姫  
 君も扱の此願成就して正身の彌陀如來げに來迎の時節よと感涙

肝に銘じつ、綺羅衣の御袖もしをるばかりに見え給ふ、地上「げに  
 や貴き物語即ち彌陀の教へぞと思ふにつけて有難や、二人上「今宵し  
 も二月中の五日にてしかも時正の時節なり法事をなさんため今  
 此寺に來りたり 地上「法事の爲に來るとゆそもやいかなる御事ぞ  
 「今の何をかつ、むべき其古への化尼化女の 地「夢中に現じ來れ  
 りと 「いひもあへねば 「光さして花ふり異香薫じ音樂の聲  
 すなり恥かしや旅人よ暇申て歸る山の二上の嶽とゆ二上の山と  
 こそ人ゆいへと眞の此尼が上りし山なる故に尼上の嶽とゆ申す

盛 麻

四





明遍照十方の衆生をたゞ西方に迎へゆく御法の舟の水馴棹御法の船のさを投ぐる間の夢の夜の夜ゆほのぐとぞなりにける

海

士 二月

ワツシ 房前大臣の體  
キレテ 同從者

後シテ 龍 女

次第一 出づるぞ名残三日月の 都の西に急がん 天地の開けし

惠久方の天の兒屋根の御讓 房崎の大臣との我事なり扱もみ

づからが御母の讃州志度の浦房崎と申す所にて空しくなり給ひ

ぬと承りていへば急ぎ彼所に下り追善をもなさばやと思ひ

立衆下 ツヨク 習のぬ旅に奈良坂やかへりみかさの山隠す春の霞ぞ恨めしき

上歌 三笠山今ぞ榮ん此岸の 南の海に急がんと行けば程なく津

(三四五) の國のこや日の本の始なる淡路のわたり末近く鳴門の沖に音す

海 士

るの泊り定めぬ海士小舟

「御急ぎひ程に是のはや讚州

志度の浦に御着にて御座候。又あれを見れば男女の差別のしらす

人一人来りひかの者を御待ちあつて。此所の謂を委しく御尋ねあ

らうずるにてひ海士の刈る藻にすむ虫にあらねども我から

ぬらす袂かな。是は讚州志度の浦寺近けれど心なきあまの

の里の海人にてひげにや名におふ伊勢をの海士夕波の内外の

山の月を待ち濱荻の風に秋を知る。又須磨の海士人の鹽木にも若

木の櫻を折りもちて春を忘れぬたよりもあるに此浦にての慰み

故に云 かつき 波なき

ワキ

「いかに是なる女おこと此浦の海士にてあるか」さんひ此浦

のかづきの海士にてひ「かづきの海士ならばあの水底のみる

めを刈りて参らせひへ「痛のしや旅づかれ飢にのぞませ給ふ

かや我すむ里と申すにかほど賤しき田舎の果にふしぎや雲の上

人をみるめ召されひへ刈るまでもなし此みるめを召されひへ

ワキ

「いやくさやうの爲にてかなし。あの水底の月を御覽するに。みる  
 め繁りて障りとなれば刈りのけよとの御誼なり。一扱の月の爲  
 刈のけよとの御誼かや。昔もさるためしあり明珠を此沖にて龍宮  
 へ取れしをかつき上しも此浦の 天満つ月もみち潮のく  
 みるめをいざや刈らうよ。一暫く何と明珠をかつき上しも此浦  
 の海士にてあると申すか。一さんび此浦の海士にてい。又あれな  
 る里をばあまの、里と申て彼海士人のすみ給ひし在所にてい。又。  
 是なる島のかの珠を取上始て見そめしによつて新しきたま島と

書いて新珠島と申い。一扱其玉の名をば何と申しけるぞ。一玉  
 中に釋迦の像まします何方より拜み奉れども同じ面なるによつ  
 て面を向ふに背かずと書いて面向不背の珠と申い。一かほどの  
 寶を何とてか漢朝よりも渡しけるぞ。一今の大臣淡海公の御妹  
 の唐土高宗皇帝の后にた、せ給ふされば其御氏寺なればとて興  
 福寺へ三つの寶を渡さる、華原磬泗濱石面向不背の玉二つの寶  
 の京着し明珠の此沖にて龍宮へとられしを大臣御身をやつし此  
 浦に下り給ひ賤しき海士乙女と契りをこめ一人の御子を設く今

海士

三

の房崎の大臣是なり

大臣

「やあ是こそ房崎の大臣よあらかなつかし

の海士人や猶々語りゆへ

シテ

「あら何ともなや。今までかよその事

とこそ思ひつるに。扱の御身の上にてゆひけるぞやあら便なやゆ

大臣

「みづから大臣の御子と生れ。恵み開けし藤の門され共心にかゝる

事の此身残りて母しらず。ある時傍臣語りて曰く忝くも御母の

讃州志度の浦房崎のあまり申せば恐れありとて言葉を残すさて

の賤しき海士の子賤の女の腹に宿りけるぞや

「よし夫とても

幣木に

暫し宿るも月の光雨露の恩にあらずやと思へば尋

ワキ

来りたりあらかなつかしの海士人やと御涙を流し給へば  
「げに  
心なき海士衣。さらでもぬらす我袖を重ねてしをれとや忝なの  
御事やかゝる貴人の賤しき海士の胎内に宿り給ふも一世ならず。  
たとへば日月の潦にうつりて光陰を増ごとくなり我らも其海  
士の子孫と答へ申さんや事も愚や我君のゆかりに似たり紫の藤  
咲門の口を閉ちていゆじや水鳥のお主の名をば朽たすまじ

「とても事に彼玉をかつぎ上し所を御前にてそと學うて御目に

かけゆへ

シテ

「さらばそと學うて御目にかけゆへし其時海士人申

海士

四

すやうもし此玉を取り得たらば此御子を世繼の御位になし給へ  
 と申しかば仔細あらじと領承し給ふ扱ひ我子ゆゑに捨ん命露程  
 も惜からじと千尋の繩を腰につけもし此玉を取えたらば此繩を  
 動かすべし其時人々力をそへ引上給へと約束し一つの利劔を抜  
 きもつて かの海底に飛入れば空のつに雲の浪煙の浪をし  
 のぎつゝ海漫々と分け入りて直下と見れ共底もなく邊りも知ら  
 ぬ海底にそも神變ゆいさしらず取えん事の不定なりかくて龍宮  
 に到りて宮中を見ればその高さ三十丈の玉塔にかの珠をこめお

玉の段  
其時人  
より

上カ

き香花をそなへ守護神の八龍並み居たり其外惡魚鰐の口逃れ難  
 しや我命さすが恩愛の古郷の方ぞ戀しきあの浪のあなたにぞ我  
 子のあるらん父大臣もおゆすらんさるにても此まゝに別れ果て  
 なん悲しきよと涙ぐみてたちしが又思ひきりて手を合せ南無や  
 志度寺の觀音薩埵の力を合せてたび給へとて大悲の利劔を額に  
 あて龍宮の中に飛入れば左右へばつとぞ退いたりける其隙に寶  
 珠を盗み取て逃んとすれば守護神追つかく兼てたくみし事なれ  
 ば持たる劔を取直し乳の下をかききり玉を押しこめ劔を捨てて伏

海士

五

したりける龍宮の習ひに死人を忌めばあたり近づく悪龍なし  
 約束の繩を動かせば人々悦び引上たりけり玉のしらす海士人の  
 海上に浮みいでたり\*「かくて浮みの出たれども悪龍の業と見  
 えて五躰もつかず赤になりたり珠も徒になりぬしも空しくな  
 りけるよと大臣歎き給ふ其時息の下より申すやうわが乳のあた  
 りを御覽ぜよと有げにも劔のあたりたる跡あり其中より光明赫  
 奕たる珠を取出す扱こそ御身も約束の如く此浦の名によせて房  
 崎の大臣との申せ今何をか包べき是こそ御身の母海士人の

幽霊よ 此筆の跡を御覽じて不審をなさて弔へや今歸らん

あだ浪の夜こそ契れ夢人のあけてくやしき浦島が親子の契り朝  
 潮の浪の底に沈みけり立つ浪の下に入りけり申す「いかに申上

ひあまりにふしぎなる御事にては程に御手跡を抜いて御覽せら

れうずるにてはツヨク扱め亡母の手跡かとひらきて見れば魂黄壤

に去て一十三年骸を白沙に埋んで日月の算を経冥路昏々たり我  
 を弔ふ人なし君孝行たらば我冥闇を助けよげにそれよりの十三  
 年\*扱の疑ふ所なしいざ弔らぬ此寺のこゝろざしある手向草





(六五五) ヨワク

今日見ずゆくやしからまし花盛咲きも残らず散りも始めずげに  
面白き歌の心たとひ音信なくとも木陰にてこそ待つべきに

上歌同  
花咲ば  
より

花さかば告げんといひし山里の  
使の來り馬に鞍鞍馬の山  
のうづ櫻手折枝折をしるべにて奥も迷ゆと咲きつゝ木陰に並  
みぬていざく花をながめん  
いかに申ひあれに客僧の渡り

は。是の近頃狼藉なる者にては追つ立てうずるにては「暫くさ

すがに此御座敷と申すに源平兩家の童形達各々御座ひにかやう

の外人の然るべからずは然れ共又かやうに申せば人を選び申す

に似ては間花をば明日こそ御覽ひへけれ先々此所をば御立ちあ

らうするにては「いやくそれの御説にてはへ共あの客僧を

追つ立てうずるにては「いや唯御立ちあらうするにては

「遙に人家を見て花あれば即ち入る論せず貴賤と親疎とを辨ぬを

こそ春の習ひときくものを浮世に遠き鞍馬寺本尊の大慈多門天

慈悲にもれたる人々かな  
げにや花の本の半日の客月の前の

一夜の友それさへ好みあるものをあら痛めしや近うよつて花

御覽ひへ「思ひよらずや松虫の音にだにたてぬ深山櫻を御訪

(七五五)

鞍馬天狗

二

牛上、ひの有難さよ此山に「ありとも誰か白雲の立交ゆられば知る

人なし「誰をかも知る人にせん高砂の「松も昔の「友鳥

の御物笑ひの種まくや言の葉しげき戀草の老をな隔てそ垣

穗の梅扱こそ花の情なれ花に三春の約あり人に一夜をなれ初め

て後いかならんうちつけに心空に檜柴のなれゆまさらて戀のま

さらんくやしきよ「いかに申ひ唯今の兒達の皆々御歸りゆに

何とて御一人是に御座ひぞ「さんひ唯今の兒達の平家の一

門中にも安藝の守清盛が子どもたるにより一寺の賞翫他山の覺

え時の花たりみづからも同山にゆひへ共よるづ面目もなき事どもにて月にも花にも捨てられてひ「あら痛ゆしやゆ流石に和

上臈の常磐腹にゆ三男毘沙門の沙の字をかたどり御名をも沙那

王殿とつけ申すあら痛ゆしや御身を知れば所も鞍馬の木蔭の月

見る人もなき山里の櫻花よその散りなん後にこそ咲かば咲べき

にあら痛ゆし御事や「松嵐花の跡訪ひて雪とふり雨

となる哀猿雲にさげんでの腸を断つとかや心すこの氣色や夕べ

を残す花のあたり鐘の聞えて夜を遅き奥の鞍馬の山道の花ぞし

鞍馬天狗

三



「月の鞍馬の僧正が、谷に満ちく峯を動かす嵐木枯瀧の音天狗だをしめおびたしや。」「いかに沙那王殿唯今小天狗を参らせでいに稽古のきつをばなんぼう御見せひぞ。」「さんひ唯今小

天狗ども来りひ程に薄手をも斬りつけ稽古のきつを見せ申度ゆ

ひひつれ共師匠にや叱られ申さんと思ひとまはりてひ。」「あら

いとほしの人やさやうに師匠を大事に思召すについてさる物語

のひ語つて聞かせ申ひべし扱も漢の高祖の臣下張良といふ者黄

石公に此一大事を相傳す或時馬上にて行き逢ひたりしに何とが

したりけん左の履を落しいかに張良あの履とつてはかせよとい

ふ安からずの思ひしか共履をとつてはかす又其後以前の如く馬

上にて行きあひたりしに今度の左右の履を落しやあいかに張良

あの履とつてはかせよといふ猶安からず思ひしかどもよしと

此一大事を相傳する上ゆと思ひ落ちたる履をおつとつて張

良履を捧げつゝ馬の上なる石公にはかせけるにぞ心とけ

兵法の奥儀を傳へける。」「其如くに和上藤もさも花やか

なる御有様にて姿も心も荒天狗を師匠や坊主と御賞翫いかに

鞍馬天狗

五

上歌同  
崇任

も大事を残さず傳へて平家を討んと思召かや優しの志しやな  
抑も武略の譽れの道  
源平藤橘四家にもとりわきかの家  
の水上の清和天皇の後胤としてあらく時節を考へ來るに驕れ  
る平家を西海に追つくだし煙波滄波の浮雲に飛行の自在を受け  
てかたきを平げ會稽を雪がん御身と守るべし是までなりやお暇  
申で立歸れば牛若袂にすがり給へばげに名残あり西海四海の合  
戦といふとも影身を離れず弓矢の力をそへ守るべし頼めや頼め  
と夕影暗き頼めや頼めと夕陰鞍馬の梢にかけつて失にけり\*

九番習  
三番習  
物

定

家

十一月

前シテ里女  
ワキ放僧

後シテ式子内親主

大第  
ヨリクキ

山より出づる北時雨  
行衛や定めなかるらん  
是の北國

方より出でたる僧にてい我未だ都を見ずい程に此度思ひ立ち都  
に上りい冬立つや旅の衣の朝まだき  
雲もゆきかふ遠  
近の山又山を越え過ぎて紅葉に残るながめ迄花の都に着にけり  
急ぎい程に是のけはや都千本のあたりにてありげにい

暫く此あたりに休らゆげやと思ひい面白や頃神無月十日餘木  
々の梢も冬枯れて枝に残りの紅葉の色所々の有様までも都の氣

定家

色の一入の眺め異なる夕べかなあら笑止や俄に時雨が降り来り  
ては是に由有げなる宿りのひ立寄り時雨を晴さばやと思ひひ

シチ女 「のうく御僧何しに其宿りへの立寄り給ひひぞ 唯今の時雨

を晴さん爲に立寄りてこそひへ 「それの時雨の亭とて由ある

所なり其心をも知るしめして立寄らせ給ふかと思へばかやうに

申すなり 「げにくは是なる額を見れば時雨の亭とかられたり

折柄面白うこそひへ是のいかなる人のたて置かれたる所にてひ

ぞ 「是の藤原の定家の卿のたておき給へる所なり都のうちと

の申しながら心すこく時雨物哀なればとて此亭をたておき時雨  
の頃の年々の爰にて歌をも詠じ給ひしとなり古跡といひ折から  
といひ其心をも知るしめして逆縁の法をも説き給ひてかの御菩  
提を御弔ひあれとすめ参らせん其爲に是迄あらわれ来りたり

ワキ 「扱の藤原の定家の卿のたておき給へる所かや 偕々時雨をとむ

る宿の歌のいづれの言の葉やらん 「いや何れ共定めなき時雨

の頃の年々なれば分きてそれと申し難しさりながら時雨時を

知るといふ心をいつのりのなき世なりけり神無月誰が誠より時

雨れ初めけん。此ことがきに私の家にてとが、れたればもし此歌  
 をや申すべき。 [げに哀なる言の葉かな。さしも時雨のいつわり  
 のなき世に残る跡ながら。] 一人のあだなる古事を語れば今も假  
 の世に。 [他生の縁の朽ちもせぬ。是ぞ一樹の陰の宿り。] 二河  
 の流を汲みてだに。 [心を知れと。] 折からに。 \*今ふるも宿  
 の昔の時雨にて。 [心すみにし其人の哀を知るも夢の世の  
 に定めなや定家の軒端の夕時雨。ふるきに歸る涙かな。庭も籬もそ  
 れとなく荒れのみ増さる。叢の露の宿りもかれぐに物すこき夕

べなりけり。 \* 今日の日志す日にては程に墓所へ参りし御  
 参りしへかし。 [それこそ出家の望にてはへやがて参らうずる  
 にては。] のうく是なる石塔御覽しへ。 [ふしぎやな是なる  
 石塔を見れば星霜ふりたるに葛葛はひまとひ形も見えずし。是の  
 いかなる人のしるしにてはぞ。] 是の式子内親王の御墓にては。  
 又此葛をば定家葛と申し。 [あら面白や定家葛と。いかやうな  
 る謂にてはぞ御物語りしへ。] 式子内親王はじめの賀茂の齋の  
 宮にそなひ給ひしが程なくおり居させ給ひしを定家の卿忍び

忍びの御契り淺からず其後式子内親王程なく空しくなり給ひし  
 に定家の執心葛となつて御墓にはひまとひ互の苦み離れやらず  
 共に邪淫の妄執を御經をよみ弔ひ給ふば猶々語り參らせしゆん  
 忘れぬものを古への心の奥の信夫山忍びて通ふ道芝の露の世語  
 今玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶ  
 る事よゆるなる心の秋の花ずき穂にいでそめし契りとして又  
 かねての中となりて 昔の物を思ひざりし 後の心ぞはて  
 しもなき あつれ知れ霜より霜に朽ちてはて 世々にふりにし

山藍の袖の涙の身の昔うき戀せじとみそぎせし賀茂の齋の宮に  
 しもそなかり給ふ身なれ共神や受けずもなりにけん人の契りの  
 色に出けるぞ悲しきつゝむとすれどあたし世のあだなる中の名  
 の洩れてよその聞えぬ大方の空恐ろしき日の光雲の通路絶えは  
 て、乙女の姿とよめえぬ心ぞつらき諸共に「げにや歎くとも  
 戀ふとも逢ふん道やなき 君葛城の嶺の雲と詠じけん心まで思  
 へばかゝる執心の定家葛と身なりて此御跡にいつとなく離れ  
 もやらで葛紅葉の色がれまとなり荊の髪も結ばれ露霜に消

定家

四



えかへる安執を助け給へや。 地上 十分に事をさくからに今日も  
 程なく吳織あやしや御身誰やらん。 女上 「誰とてもなき身のはての  
 淺茅生の霜にくちにし名ばかりの残りても猶よしぞなき。 地上 「よ  
 しや草葉の忍ぶ共色にの出てよ其名をも。 女 「今の包まじ。 地上 「此上  
 の我れこそ式子内親王是迄見え來れ共眞の姿のかけろふの石に  
 残す形だに夫共みえず葛葛苦しみを助け給へといふかと見えて  
 失にけり。 上歌ワキ 「夕べも過ぐる月影に。 女 松風ふきて物す  
 こき草の蔭なる露の身を思ひの玉の數々に申ふ縁のありがたや

後女下 甲 「夢かよ闇のうつつ、の宇津の山月にもたどる葛の細  
 道昔の松風蘿月に詞をかつし翠帳紅閨に枕をならべ。 地 「様々な  
 りし情の末。 女 「花も紅葉も散りぐに。 地 「朝の雲。 女 「夕べの雨  
 と。 同上 古事も今の身も夢も現もまぼろしも共に無常の世となり  
 て跡も残らず何なかくの草の蔭さらば葎の宿ならで外つれ  
 なき定家葛是見給へや御僧。 女 「あら痛のしの御有様やなあら痛  
 のしや佛平等説如一味雨隨衆生性所受不同。 女 「御覽ぜよ身のあ  
 だ浪の立居だになき跡までも苦しみの定家葛に身をとちられて。

定家

かゝる苦しみ隙なき處に有難や唯今讀誦し給ふの藥草喻品よの  
 「中々なれや此妙典にもる、草木のあらざれば執心の葛を  
 掛け離れて佛道ならせ給ふべし」  
 妙なる法の教「あまねき露の恵を受けて」  
 「三つもなき」  
 一味の御法の雨のしたゞり皆濕ほひて草木國土  
 悉皆成佛の機をえぬれば定家葛もかゝる涙もほろくと解けひ  
 るればよろくと足弱車の火宅を出てたる有難さよ此報恩に  
 いざさらばありし雲井の花の袖昔を今に返すなる其舞姫の小忌

「おもなの舞の」  
 「有様やな」  
 「おもなの舞の有様やな」  
 「おもなやおもはゆの有様やな」  
 「本より此身の」  
 「月の顔ばせ」  
 「曇りがちに」  
 「桂のまゆずみも」  
 「おちぶる、涙の」  
 露ときえてもつたなや葛の葉の葛城の神姿はつかしやよしなや  
 夜の契りの夢のうちにと有りつる所に歸るの葛の葉のもとの如  
 くはひまとゆる、や定家葛はひまとゆる、や定家かつらのほか  
 なくも形の埋もれて失にけり

五番目  
略協能

咸陽宮

十月

ワツシ  
キレテ  
荊  
始  
陽  
夫人

ワキツレ  
奏  
舞  
陽  
臣

抑も此咸陽宮と申すの都のまわり一萬八千三百餘里  
内裏

地より三里高く雲をしのぎてつきあげて鐵の築土方四十里

又の高さも百餘丈雲路を渡るかりがねも雁門なくて過ぎ難し

内に三十六宮あり眞珠の砂瑠璃の砂黄金の砂を地に敷き

長生不老の日月までいらかを並べておびたし  
帝の御殿

阿房宮あかしの柱三十六丈  
東西九町  
南北五町  
五

丈の旗矛  
りうしやの雲井  
さながら天に  
飄へり

咸陽宮

(七七五)  
(龍車)

上歌同  
(八七五)

登れば玉のきざはしのくく 金銀を磨きて輝やけり唯日月の影  
 をふみ蒼天を渡る心ちしておのくく 肝を消すとかやおのくく 肝  
 をけすとかや「思ひたつ朝の雲の旅衣落葉かさなる嵐かな  
 「山遠うしての雲行客の跡を埋み 「松高うしての風旅人の夢を  
 やぶる 「縦ひ轅門の高くとも 「思ひの末の 「石にたつ  
 やたけの心顯われてくく 遠山の雲に日を重ねやうくゆけば  
 名も高き咸陽宮に着にけりく 「急ぎひ程に咸陽宮に着て  
 ひまづ奏聞申さうするにていかに奏聞申ひ燕の國のかたゆら

(九七五)

シテ

に荆軻秦舞陽と申す兩人の者高札の表に任せ燕の指圖の箱並に  
 樊於期が首を持ちて是まで參内申てい「何と申すぞ燕の國の  
 民に荆軻秦舞陽と申す兩人の者燕の指圖の箱並に樊於期が首を  
 持ちて參内したると申すかかゝるめてたき事こそなけれやがて  
 奏聞申ひべしいかに奏聞申ひ燕の國の民に荆軻秦舞陽と申す兩  
 人の者燕の指圖の箱並に樊於期が首を持ちて唯今參内申てい  
 「何と燕の國の傍に荆軻秦舞陽と申す兩人の者指圖の箱並に樊於  
 期が首を持ちて參内したると申すか 「さんい 「急いで參内

成陽宮

大臣

シテ

二

大臣

させゆへ  
 「畏てゆ。唯今のよしを奏聞申てあれば急いで参内させよとの宣旨にてあるぞ。さりながら御大法の如く太刀かたなを汝預かりゆへ  
 ▲「畏てゆ。いかに方々へ申ゆ。急いで御参内あれとの御事にてゆ。さりながら御大法の事にてゆ。間面々の太刀かたなを預かり申て参内させ申せとの御事にてゆ。ぞ。太刀かたなを賜りゆへ▼「いかに秦舞陽。太刀かたなを参らせよと承りゆ。が何と仕りゆべき  
 「御大法にてゆ。ゆ。ば唯参らせられゆへ  
 「さらば参らせうずるにてゆ。ゆ。く「荆軻の佩劔を解いて威儀をなし節會の

成陽宮

大臣

三

儀式に従ひて雲上遙に見渡せば  
 「金銀珠玉の御階をふみ。三里が間を登りゆけば  
 「薄氷を踏む心ちして荆軻の既に登れども跡に立ちたる秦舞陽。身軀わな。き手を。して登り兼ねてぞ休らひける  
 「あ。不覺なりとよ。秦舞陽。燕の賤しき住まぬにならつて玉殿をふむ。恐ろしさに臆して上り兼ねけるか  
 「それをな。さのみ諫め給ひ。そ。其。積礫に習つて玉淵を窺ひ。さる。の。驪龍の蟠る所を知らず  
 げに理りとして。てん。く。ゆ。さ。し。も。き。び。し。き。禁。中。に。轅門を解いて許しけり」  
 「帝の是を聞召し臨時の節會をと

「行ひ燕使の参内を待ち給ふ。舞陽荆軻の大床の胡床に参着  
 申しけり。『まづ秦舞陽進み出て樊於期が首を皇帝の上覽に供  
 へ立ちのけば。』帝の笑める御氣色御心も解けて見え給ふ。」

「其時荆軻進みよつて燕の指圖の箱の蓋を開き上覽に供へ立ちの  
 けば。『ふしぎやな箱の底に劔の影氷の如く見えければ既に立  
 去り給ゆんとす。』荆軻の期したる事なれば御衣の袖にむんず  
 とすがつて劔を御胸にさしあて奉りけり。『淺ましや聖人人に  
 まみえずとの。今此時にて有りけるぞや。あら淺まし御事やな。』」

シテ

「いかに荆軻秦舞陽もたしかに聞け我三千人の后を持つ。其中に花  
 陽夫人とて琴の上手あり。されば毎日怠る事なし。然れ共けふの汝  
 らが参内により。未だ琴の音をきかず殊更今の最期なれば片時の  
 暇をくれよ。彼琴の音をきいて黄泉の道をも免れうずると思ふの  
 いか。』  
 「是程まで手  
 こめ申す上の片時の御暇ならば参らせられけへ。」

「いかに花陽夫人急ぎ秘曲を奏  
 し給へ。」  
 「さらば秘曲を奏すべし。もとより妙なる琴の音にとぶ。」

鳥も地に落ち武士もやめらぐ程の秘曲なればましてや今の玉  
 の緒琴さこそ御手もつくされけめ 同上  
 花の春の琴曲の花風樂  
 に柳花苑柳花苑の鶯の同じ曲の囀り月の前の調めの夜寒をつぐ  
 る秋風雲井に渡れるかりがね琴柱におつる聲々も涙の露の玉章  
 たまさかに 人ゆも白糸の調めをあらためて君さけや君  
 きげや七尺の屏風の躍らば越えつべし羅穀の袂をもひかばなど  
 か切れざらん謀臣の有無に酔へり群臣の聖人の御たすけと押返  
 し 二三返の琴の音を君の聞しめさるれども荆軻の聞知ら

て唯緩々とおかされて眠れるが如くなり 時うつるくと秘曲  
 たびぐ重なれば 荆軻がひかへたる御衣の袖をひつきつて  
 屏風をおどりこえ電光の激しるよそほひ霰の白玉盤におちて欄  
 干を走るこちしてあかしの御柱に立ちかくれさせ給ひしか  
 ば 荆軻の怒をなして 劍を帝に投げ奉れば番の醫師の薬の  
 袋を劍に合せてなげとめければ 帝亦劍をぬいて 荆軻  
 をも秦舞陽をも八つさきにさき給ひ忽ちにうしなひおひしまし  
 其後燕丹太子をも程なく滅ぼし秦の御代萬歳をたもち給ふ事唯





界無縁の功力を以て渡し給ひし橋なれば、今又かやうにすゝむる  
 なり 「扱々東岸西岸居士の郷里のいつくいかなる人の父母を  
 離れし御出家ぞや」 「むつかしの事を問ひ給ふやもとよりきた  
 る所もなければ出家といふべき謂もなし出家にあらねば髪をも  
 そらず衣を墨に染めもせて唯おのづから道に入つて 「善を見  
 ても」 「進まず」 「智を捨てても」 「愚ならず」 「折にふれ  
 事事小に渡りて白川に」 「かゝれる橋の」 「西」 「東の」 \* 東岸西  
 岸の柳の髪に長く亂るゝ共南枝北枝の梅の花開くる法の一すぢ

に渡らん爲の橋なれば勧めに入りつゝかの岸に至り給へや \*  
 又いつもの如く諷うて御聞かせゆへ 「げにぐ是も狂言綺語

を以て讚佛轉法輪の誠の道にも入なれば人の心の花の曲いざや  
 諷ゆん是ととも 御法の舟の水馴棹御法の舟の水馴棹皆かの  
 岸に至らん 「面白や是も胡蝶の夢のうち」 「遊び戯れ舞ふと  
 かや」 「鈔に又申さくあらゆる所の佛法の趣き 箇々圓成の道  
 すぐに今にたえせぬ跡とかや」 \* 「但し正像既に暮れて未法に生  
 を受けたり かるが故に春過ぎ秋來れ共進み難きの出離の道

東岸居士

終り迄

シテ上

「花を惜み月を見ても起り易き安念なり

同上

罪障の山にのいつ

となく煩惱の雲あつうして佛日の光晴れ難く

「生死の海にの

無明の波

あらくして真如の月宿らず

生をう

くるに任せて苦しみを受けかされ死に歸るに随つて闇きよ

り闇きに赴く六道の街にの迷ぬ所もなく生死の扉にの宿らぬ

住家もなし生死の轉變をば夢とやいぬ又現とやせん是れらあ

りといぬとすれば雲と昇り煙と消て後其跡を留むべくもなし

なしといぬとすれば又恩愛の中心留まつて腸をたち魂を動か

さすといふ事なしかの芝蘭の契りの袂にの屍をば愁嘆の焰に  
がせ共紅蓮大紅蓮の氷をば終にとかす事なし鴛鴦の衾の下に眼  
をば慈悲の涙に濕せ共焦熱大焦熱の焰をば終に示す事なしか  
る拙き身を持ちて

「殺生偷盜邪淫の身に於て作る罪なり妄

語綺語惡口兩舌の口にて作る罪なり貪欲嗔恚愚癡の又心に於て

絶せず御法の舟の水馴棹皆かの岸に至らん

鼓をうつて御見せひへ

面白や松吹く風颯々として波の聲茫々たり

東岸居士

ワキ

風のさゝら 「うち連ゆくや橋の上」男女の往来 「貴賤上下の

袖を連れて玉衣のさいく沈み浮き波のさゝら八撥打つれて百

千鳥 百千鳥囀る春の物毎に 「改まれども我ぞふりゆく

行くの白河 「行くの白河の橋を隔て向ひの」東岸 「こな

たの 「西岸」波の 「さゝら」うつ浪の 「つゞみ

いづれも 極樂の歌舞の菩薩の御法との聞き知らずや旅

人よ あら面白や 「お、南無三寶」げに太鼓も羯鼓も

笛ひらりさ絃管ともに極樂のお菩薩の遊びときくものを 「何

とたたき 何とたたき雪や氷と隔つらん萬法みな一如なる實相の

門に入らうよ

東岸居士



け <sup>ワキ</sup> 「ふしぎやな此川を渡り龍田の明神に参りひ處に何とてそ  
 の川な渡りそと承りひぞ <sup>女</sup> 「さればこそ神に参り給ふも神慮  
 にあゆん爲ならずや心もなくて渡り給はば神と人との中や絶え  
 なくよくく案じて渡り給へ <sup>ワキ</sup> 「げに今思ひ出したり龍田川紅  
 葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶なんとの古歌の心を思へと  
 や <sup>女</sup> 「中々の事此歌の紅葉の水に散り浮きて錦を張れる如くな  
 れば渡らば錦中や絶えなんとなりそれにつき猶々ふかき心もあ  
 り紅葉と申すの當社の神祇神の畏れもあるべければと戒め給ふ

心もあり <sup>ワキ</sup> 「げにぐそれのさる事なれ共紅葉の頃も時過て河  
 の面もうす氷にて立つ波迄も見えぬなりゆるさせ給へ渡りてゆ  
 かん <sup>女</sup> 「いやく猶も御科あり氷にも又中絶えんとの其戒めも  
 ある物を <sup>ワキ</sup> 「ふしぎや紅葉の錦ならで氷にも又中絶えんとの謂  
 いかなる事やらん <sup>女</sup> 「紅葉の歌の帝の御製又其後家隆の歌に  
 龍田川紅葉を閉づるうす氷渡らばそれも中や絶えなんと重ねて  
 かやうに詠みたれば必ず紅葉に限るべからず <sup>上歌同</sup> 「氷にも中たゆ  
 る名の龍田川 <sup>龍田</sup> 錦織りかく神無月の冬川になる迄も紅葉を

とづるうす氷を情なや中絶えて渡らん人の心なやさなきたに危  
きの薄氷を踏ことゆりのたとへも今に知られたり

御身のいかなる人にてわたりひぞ 「是の親にてひ明神へ御参

りひゆば御道しるべ申ひべし 「あら嬉しや御供申し宮廻り申

さうするにてひ 「是こそ龍田の明神にて御入りひへよくく

御拜みひへ 「ふしぎやな頃の霜ふり月なれば木々の梢も冬が

れて景色さみしき社頭の御垣に盛なる紅葉一本見えたり是の御

神木にてひか 「さんい當國三輪の明神の神木の杉なり當社の

紅色にめて給ふにより紅葉を神木とあがめ参らせひ 「ありが

たやわれ國々を廻り今日又此御神に参る事の有難さよ和光同

塵の結縁の始め八相成道の利物の終り 下紅葉塵に交ひる神

心和光の影の色そへて我らを守り給へや 殊更に此度の

幣取あへぬをりなるに心してふけ嵐紅葉を幣の神さる神さび

心もすみわたる龍田の嶺のほのかにて川音も猶さえまざる夕暮

いさ宮廻り始めんとて名におふ龍田山同じかさしの榊葉をとり

ぐに乙女子が裳裾をはへて袖をかざし運ぶ歩みの數々に度か

さなると見る程にふしぎやな今迄のたゞ現と見えつるが我の眞  
 の此神の龍田姫の我なりと名のりもあへず御身より光をはなち  
 てくれなぬの袖をうちかつき社壇の扉を押開き御殿にいらせ給  
 ひけりワキ上歌神の御前に通夜をして待詠有つる告をまた  
 んとて袖をかたしき臥にけり後シテ上一段神の非禮を受給ひす水  
 上清しや龍田の川「御殿頻に鳴動して宜禰が鼓も聲々に「有明  
 の月燈火の光打上和光同塵おのづから光も朱の玉垣輝きてあら  
 だに御神躰顯れたり打上「我切初よりこのかた此秋津洲に地を占

めて御代を守りの御矛を守護し紅葉の色も八葉のは即ち矛の刃  
 先なるべし劔の驗僧の法味に引れて夜半に神燈明らかかなり  
 「抑も瀧祭の御神とゆ即ち當社の御事なり「昔天祖のみことの  
 り 未明かなる御國とかや \*然れば當國寶山に至り 天地お  
 さまる御代のためし民安全に豊なるも偏に當社の御故なり  
 梢の秋の四方の色 千秋の御影目前たり \*年毎にもみち葉な  
 がる龍田川湊や秋のとまりなる山も動せず海邊も浪靜にて樂し  
 みのみの秋の色名こそ龍田の山風も靜なりけり然れば代々の歌

終り迄 シテ下 申在 甲

人もこゝろを染めてもみぢ葉の龍田の山の朝霞春の紅葉にあら  
 ね共たゝ紅色にめて給へばけさよりの龍田の櫻色ぞこき夕日や  
 花の時雨なるらんと詠みしもくれなぬに心をそめし詠歌なり  
 「神なみの御室の岸やくづるらん。龍田の川の水のにこる共和光  
 の影の明けき眞如の月の猶照るや龍田川紅葉亂れし跡なれや古  
 への錦のみ今の氷の下紅葉あらうつくしや色々の紅葉重ねのり  
 す氷渡らば紅葉も氷も重ねて中絶ゆべしやいかで今の渡らん  
 「さる程に夜神樂の〜時うつり事去りて宜禰が鼓も數至りて

月も霜も白和幣ふりあげて聲すむや 「謹上」 「再拜」 「久か  
 たの月もおちくる瀧まつり 「波の龍田の」 「神の御前に」 神  
 の御前にちるゆもみぢ葉 「即ち神の幣」 「龍田の山風の時雨  
 降る音の」 「颯々の鈴の聲」 「たつや川波の」 「それぞ白木綿  
 神風松風ふきみだれ吹き亂れもみぢ葉散りとぶゆふつけ鳥の御  
 祓も幣もひるがへる小忌衣謹上再拜再拜再拜と山河草木國土治  
 まりて神のあがらせ給ひけり

龍田



四番目 略二番

夜討曾我

五月

トツシモレテ曾我五郎時政  
團三郎虎王

後ツレ敵兵數人  
後ツレ御所の五郎丸

大第二  
トツシモレテ  
ツヨク

「其名も高き富士の嶺のく御狩にいざや出でうよ」是の曾

我の十郎祐成にては扱も我君東八ヶ國の諸侍を集め富士の牧狩

をさせられし間我ら兄弟も人なみにまかりいて唯今富士の裾野

へと急ぎし「けふ出ていつ歸るべき古郷と思へば猶もいと」

しく名残を残す我宿のく垣の雪の卯の花の咲散る花

の名残ぞと我足がらや遠かりし富士の裾野に着にけり

(五〇六) 十郎

「急ぎし程に是のけはや富士の裾野にてはいかに時致然るべき所に

夜討曾我

幕を御うたせしへ

五郎

「畏てし

十郎

「いかに時致。今に始めぬ御事な

れ共我君の御威光のめでたさゆい。うち並べたる幕のうち目を驚

かしたる有様にてし。か程に多き人の中に我ら兄弟が幕の内程物

さびたるゆいまじ

五郎

「さんし今に始めぬ君の御威光にてし。扱か

のあらましゆい

十郎

「あらまじとゆ。何事にてしぞ

五郎

「あら御情な

や。我らゆ片時も忘るゝ事ゆなくし。かの祐経が事しよ

十郎

「げにげ

に某も忘るゝ事ゆなくし。扱いつをいつ迄ながらへし。べきともか

くも然るべきやうに御定めしへ

五郎

「御誼の如く。いつをいつとか

定めしべき今夜夜討がりに彼者を討たうするにてし

十郎

「それが

然るべし。さらばそれに御定めしへ。や。思ひ出したる事のし。我ら

故郷を出し時母にかくとも申さずし程に御歎きあるべき事。是の

み心にかゝりし間。鬼王か團三郎か兄弟に一人形見の物を持たせ。

古郷へ歸さうするにてし

五郎

「げに是ゆ尤にてし。さりながら一人

歸れと申しゆば。定めてとかく申しべし。唯二人共に御歸しあれか

十郎

しと存し。尤にてし。さらば二人共に此方へ参れと御申しへ

「畏てし。いかに團三郎。鬼王此方へ参りしへ

五郎

「畏てし

五郎

「團三郎

兄弟是へ参りて十郎いかに團三郎。鬼王も慥にきけ汝兄弟に申すべき事を承引すべきか。又承引すまじきかまつすぐに申十郎へ

「是の今めかしき御誼にて十郎い何事にもいへ御意を背く事のあるまじく十郎い「あらうれしや。扱の承引すべきか「畏てい何事も御誼をば背き申すまじく十郎い

「此上の委しく語りいべし。扱も我らが親の敵の事かの祐經を今夜夜討がけに討つべきなり。兄弟空しくなるならば故郷の母歎き給ゆん事餘りに痛のしくい程に。形見の品々を持ちて。一人ながら故郷へ歸りいへ十郎「是の思ひもよらぬ御誼にてい物かな御意も御意にこそよりいへ。此年月奉公申いも。此御大事にまつさきかけて討死仕るべき爲にてこそいへ何と御誼いとも。此義に於いてい罷り歸るまじくい。鬼王さやうにていなさかオニ王「中々の事尤にてい。罷り歸る事のあるまじくい「何と歸るまじいと申すか十郎「ふつと罷り歸るまじくい「是のふしぎなる事を申すものかな。扱こそ以前に詞を固めていに。扱のふつと歸るまじきか十郎「さんい「汝のふしぎなる者にてい。のう五郎殿あれを御歸しいへ五郎「畏てい。やあ何とて。罷り歸るま

夜討會我

夜討會我

じいと申すぞ。さやうに申さうずると思召してこそ始より詞を

固めて仰せられゆに。何とて歸るまじいと申すぞ。しかと歸るま

じきがオニ「まづ畏つたると御申ゆへダシ「畏てゆ五郎「しかと歸ら

うずるかダシ「罷り歸らうずるにてゆ五郎「お、それにてこそゆへ、

罷り歸らうずると申ゆ十郎「何と歸らうずると申すかダシ「さんゆ、

いかに鬼王に申ゆオニ「何事にてゆぞダシ「扱何と仕ゆべき罷り歸

れば本意に非ず歸らねば御意に背く。とかく進退爰に極つてゆ

「仰の如く罷り歸れば本意に非ず。又歸らねば御意に背く。我らも是

非をわきまへずゆ。但しきつと案じ出したる事のゆ。いづくにても

命を捨つるこそ肝要にてゆへ。恐れながら團三郎殿と是にて刺し

違へゆべしダシ「げにぐいづくにても命を捨つるこそ肝要なれ。

いざさらば刺し違ようオニ「尤にてゆ五郎「あ、暫く是の何とした

る事を仕りゆぞ十郎「やあ兄弟の者歸すまじきぞ。先々心を

静めて聞きゆへ。今夜此所にて祐經をうち。我ら兄弟空しくならば。

扱故郷にまします母に誰かかくと申すべきぞ敬ふ者に従ふの君

臣の禮と申すなり。是を聞かずの生々世々永き世までの勘當と

上歌同  
(二一六)

かきくどき宣へばく鬼王團三郎さらば形見を賜ゆらんと云  
ふ聲の下よりも不覺の涙せきあへず  
それ人の形見を贈りし  
ためしにの彼唐土の樊噲が母の衣を着替へしゆ長き世までのた  
めしかや  
今當代の弓取の母衣との是を名づけたり  
然れば  
我らが賤しき身を譬ふべきにのあらね共恩愛の契のあゆれさゆ  
我らをへだてぬ習ひなり  
去程に兄弟文こまぐくと書きをさ  
め是の祐成が今の時にかく文の文字消えてうすく共形見に御  
覽いへ皆人の形見にの手跡に増るものあらじ水莖の跡をば心に

(三一六)

かけてとひ給へ老少不定ときく時の若き命も頼まれず老いたる  
も残る世の習ひ飛花落葉の理りと思召されよ其時時致も肌のまま  
もりを取り出し是の時致が形見に御覽いへ形見の人のなき跡の  
思ひの種と申せ共せめて慰むならひなれば時致の母上にそひ申  
したると思召せ今迄の其ぬしを守り佛の觀世音此世の縁なくと  
來世をばたすけ給へや  
既に此日も入相の鐘もはや聲々に  
諸行無常と告げ渡るさらばよ急ぎ急ぎ使涙を文に巻きこめて其  
まゝやる文の干ぬ間にと詠ぜし人の心まで今更思ひ白雲のか

夜討會我

るや富士の裾野より曾我に歸れば兄弟すごとくと跡を見送りて  
 泣きてとよまる哀さよ  
 後ツレ同  
 「よせかけてうつ白波の音高く  
 関を作つてさわぎけり早苗」あらおびたしの軍兵やな我ら兄弟  
 うたんとて多くの勢の騒ぎあひてこゝを先途と見えたるぞや十  
 郎殿く何とてお返事ゆなきぞ十郎殿宵に新田の四郎と戦ひ  
 給ひしが扱ひはや討たれ給ひたるよな口惜しや死なば骸を一所  
 とこそ思ひしに物思ふ春の花盛散りくになつてこゝかしこ  
 上ツレ同  
 「に骸をさらさん無念やな打上味方の勢の是を見てく打物の

鏑もとくつるげ時致を目がけてかゝりけり「あら物々しやお  
 のれらよ」さきに手並の知るらんものをと太刀取直し立つ  
 たる氣色ほめぬ人こそなかりけれかゝりける處に御内方  
 の古屋五郎樊噲が怒をなし張良が秘術をつくしつゝ五郎がおも  
 てに斬つてかゝる時致も古屋五郎が抜いたる太刀の鎬をけつり  
 暫しが程の戦ひしが何とかきりけん古屋五郎の二つになつてぞ  
 見えたりけるかゝりける處に御所の五郎丸御前に入た  
 てかなぬし物をと肌にくの鎧の袖を解き草摺かるげにざつくと投

(六一六)

打カケリ  
上頭

げかけ上にゆうす衣ひきかつき唐戸のわきにぞ待ちかけたる  
 今の時致も運つき弓のくも落ちて眞の女ぞと油断して通  
 るをやり過ごしおしならべむんずと組めば「おのれの何者ぞ  
 御所の五郎丸 あら物々しとわだがみつかんでえいやくと組  
 みころんで時致上になりける處を下よりえいやと又押返し其時  
 大勢おり重なつて千條の繩をかけまくもかたじけなくも君の御  
 前に追つ立てゆくこそめでたけれ

五郎丸

三番目

夕

顔

九月

前シテ里  
ワキ旅 女

後シテ夕顔の上

ワキ同

(七一六)

是の豊後の國より出たる僧にては扱も松浦箱崎の誓ひも勝れた  
 るとの申せ共猶も名高き男山に参らんと思ひ此程都に上りては  
 今日も又立出で佛閣に参らばやと思ひは尋ね見る都に近き  
 名所ゆまづ名も高く聞えける雲の林の夕日影うつるふ方の秋草  
 の花紫の野を分けて賀茂の御社伏拜みく糺の森もうち  
 すぎて歸る宿りの在原の月やあらぬとかこちける五條あたりの  
 あばらやの主も知らぬ所まで尋ねとひてぞ暮らしける

急ぎゆ程に。是ゆはや五條あたりにてありげにゆ。ふしぎやなあの  
 屋づまより。女の歌を吟ずる聲の聞えゆ。暫く相待ち尋ねばやと思  
 ひゆ。山シテ女ニの端のころもしらて行く月下のうの空にて影や絶  
 えなん巫山の雲の忽ちに陽臺のもとに消え易く湘江の雨のしば  
 くも楚畔の竹を染むるとかや。爰のまた本より所も名を得  
 たる古き軒端の忍ぶ草忍ぶ方々多き宿を紫式部が筆の跡にた  
 何がしの院とばかり書き置きし世の隔たれど見しも聞きしも執  
 心の色をも香をも捨てざりし。涙の雨の後の世の障りとなれ

ば今も猶サつれなくも通ふ心の浮雲をサ拂ふ嵐の風サのま  
 に真如の月も晴よとぞむなしき空に仰ぐなるサ。「いかに  
 是なる女性ニに尋申べき事のゆ。」「此方の事にてゆか何事にてゆ  
 ぞ。」「扱サこゝをばいづくと申ゆぞ。」「是こそ何某の院にてゆへ  
 「ふしぎやな何某の山何某の寺の名の上の唯かりそめの言の葉や  
 らん。又それを其名に定めしやらん承り度こそゆへ。」「さればこ  
 そ初めよりむつかしげなる旅人と見えたれ。紫式部が筆の跡に唯  
 何某の院とかきて。其名をさだかに顯さず。然れども爰の古りにし



融の大<sup>オホ</sup>臣<sup>チノ</sup>すみ給<sup>たま</sup>ひにし所<sup>ところ</sup>なるを其世<sup>よ</sup>を隔<sup>へ</sup>て光<sup>ヒカリ</sup>君<sup>キミ</sup>また夕<sup>ユフ</sup>顔<sup>ガハ</sup>の露<sup>ツユ</sup>の  
 世<sup>よ</sup>に上<sup>ウヘ</sup>なき思<sup>おも</sup>ひを見給<sup>たま</sup>ひし名<sup>な</sup>も恐<sup>おそ</sup>ろしき鬼<sup>カキ</sup>の形<sup>かたち</sup>それもさながら  
 苔<sup>コケ</sup>むせる河<sup>カハ</sup>原<sup>ハラ</sup>の院<sup>イノ</sup>と御<sup>ミ</sup>覽<sup>ミ</sup>ぜよ 嬉<sup>ウレ</sup>しや扱<sup>あ</sup>つ昔<sup>むかし</sup>より名<sup>な</sup>におふ所  
 を見る事<sup>こと</sup>よ我<sup>われ</sup>らも豊<sup>トヨ</sup>後<sup>ノチ</sup>の國<sup>くに</sup>の者<sup>もの</sup>其玉<sup>タマ</sup>蔓<sup>マツ</sup>のゆかりともなして今<sup>いま</sup>又  
 夕<sup>ユフ</sup>顔<sup>ガハ</sup>の露<sup>ツユ</sup>消<sup>き</sup>え給<sup>たま</sup>ひし世<sup>よ</sup>語<sup>ことば</sup>をかたり給<sup>たま</sup>へや御<sup>ミ</sup>跡<sup>あと</sup>を及<sup>およ</sup>びなき身<sup>み</sup>も弔<sup>な</sup>  
 かん 抑<sup>おさ</sup>も光<sup>ヒカリ</sup>源<sup>ノチ</sup>氏<sup>ノ</sup>の物<sup>もの</sup>語<sup>ことば</sup>言<sup>ことば</sup>葉<sup>は</sup>幽<sup>ウツ</sup>艶<sup>エン</sup>をもととして理<sup>ことば</sup>淺<sup>あ</sup>きに似<sup>に</sup>た  
 りといへども 心<sup>こころ</sup>苦<sup>くる</sup>提<sup>た</sup>心をすめて義<sup>ぎ</sup>殊<sup>じゆ</sup>に深<sup>こほ</sup>し誰<sup>たれ</sup>かの假<sup>かり</sup>にも語  
 りつたへん 中<sup>なかつ</sup>にも此<sup>こゝ</sup>夕<sup>ユフ</sup>顔<sup>ガハ</sup>の卷<sup>まき</sup>殊<sup>じゆ</sup>に勝<sup>か</sup>れて哀<sup>あは</sup>なる 情<sup>なさけ</sup>の道<sup>みち</sup>

終り比子

も淺<sup>あ</sup>からず契<sup>ちぎ</sup>り給<sup>たま</sup>ひし六<sup>む</sup>條<sup>じょう</sup>の御<sup>ミ</sup>息<sup>いき</sup>所<sup>ところ</sup>に通<sup>とほ</sup>ひ給<sup>たま</sup>ふよすがに寄<sup>よ</sup>りし  
 中<sup>なかつ</sup>宿<sup>しゆく</sup>に 唯<sup>ただ</sup>やすらひの玉<sup>たま</sup>銚<sup>さう</sup>の たよりにたてし御<sup>ミ</sup>車<sup>くるま</sup>なり  
 ものあやめも見<sup>み</sup>ぬあたるの小<sup>こ</sup>家<sup>や</sup>がちなる軒<sup>のき</sup>のつまに咲<sup>さ</sup>きか  
 りたる花<sup>はな</sup>の名<sup>な</sup>もえならず見<sup>み</sup>えし夕<sup>ユフ</sup>顔<sup>ガハ</sup>のをり過<sup>あ</sup>さじとあだ人の  
 心<sup>こころ</sup>の色<sup>いろ</sup>の白<sup>しろ</sup>露<sup>つゆ</sup>の情<sup>なさけ</sup>置<sup>お</sup>きける言<sup>ことば</sup>の葉<sup>は</sup>の末<sup>すえ</sup>を哀<sup>あは</sup>と尋<sup>たず</sup>ね見<sup>み</sup>し雀<sup>すずめ</sup>の扇<sup>あふぎ</sup>の  
 色<sup>いろ</sup>ことに互<sup>あひ</sup>に秋<sup>あき</sup>の契<sup>ちぎ</sup>りとゆなきかりし東<sup>あづま</sup>雲<sup>ぐも</sup>の道<sup>みち</sup>の迷<sup>まよ</sup>ひの言<sup>ことば</sup>の葉<sup>は</sup>  
 も此<sup>こゝ</sup>世<sup>よ</sup>のかくばかりはかなかりける浮<sup>う</sup>蟬<sup>せみ</sup>の命<sup>いのち</sup>かけたる程<sup>ほど</sup>もなく  
 秋<sup>あき</sup>の日<sup>ひ</sup>やすく暮<sup>く</sup>れはて、宵<sup>よ</sup>の間<sup>ま</sup>過<sup>あ</sup>ぐる古<sup>ふる</sup>郷<sup>さと</sup>の松<sup>まつ</sup>の響<sup>こゝろ</sup>も恐<sup>おそ</sup>ろしく

女上

「風にまた、く燈火の消ゆると思ふこゝちしてあたりを見れば  
 烏羽玉のやみの現の人もなく、いかにせんとか思ひ川うたかた人  
 の息消えて歸らぬ水の泡とのみ散りはてし夕顔の花ゆふた、び  
 咲かめやと夢に來りて申すとてありつる女もかき消すやうに失  
 にけり、  
 しつ、法華讀誦の聲絶えず申ふ法ぞ誠なる、  
 に女五障の罪深きに聞くも氣疎き物の氣の人失ひし有様を顯  
 す今の夢人の跡よく弔ひ給へとよ打上ふしぎやさて夕宵の間の

女下

山の端出し月影のほの見えそめし夕顔の末葉の露の消え易き本  
 の雪の世話をかけて顯し給へるか  
 見給へ爰もおのづから氣  
 疎き秋の野らとなりて  
 池の水草に埋もれてふりたる松の陰  
 闇く  
 又鳴きささぐ鳥のから聲身にしみ渡るをりからを  
 「さも物すこく思ひ給ひし  
 心の水の濁江にひかれてかゝる身  
 となれども優婆塞が行ふ道をしるべにて  
 來ん世も深き契り  
 絶えずな  
 「お僧の今の弔ひを受けて、  
 弔ひを受けて數々嬉しやと  
 夕顔の笑の眉  
 開くる法華の

打上

地上

同

(四二六)

女下

「花房も 變成男子の願ひのまゝに解脱の衣の袖ながら今宵の  
何を つまんと云ふかと思へば音羽山嶺の松風通ひ来て明け渡  
る横雲の迷ひもなしや東雲の道より法に出るぞとあけぐれの空  
かけて雲のまぎれに失にけり」

九番習  
四番目

角田川

三月

シテ 梅若丸の母  
于方 梅若丸幽霊

ワキ波 守  
ツレ旅 男

ウキ同

「是の武藏の國角田川の渡し守にては今日の舟を急ぎ人々を渡さ

ばやと存け又此在所にさる仔細あつて大念佛を申す事の仲間僧

俗を嫌はず人数をあつめけ其由皆々心得けへ 末も東の旅衣

日も遙々の心かな 「かやうにけ者ゆ都の者にては我東

に知る人のけ程にかの者を尋て唯今罷り下りけ 雲霞あと遠

山に越えなして 幾關々の道すがら國々過ぎてゆく程に爰

ぞ名におふ角田川渡りに早く着にけり 急ぎけ程に是の

(五二六)

角田川

はや角田川の渡りにてゆ。又あれを見れば舟が出でゆ。急ぎ乗らば  
やと存ゆ。いかに船頭殿舟に乗らうずるにてゆ。 「中々の事召さ

れゆへ先々御出でゆあとのけしからず物騒にゆ何事にてゆぞ

「さんひ都より女物狂の下りゆが是非もなく面白う狂ひゆを見ゆ

よ。 「さやうにゆゆば暫く舟をとめてかの物狂を待たうずる

にてゆ。 「げにや人の親の心ゆ間にあらね共子を思ふ道に迷ふ

との今こそ思ひ白雪の道行き人に言傳て、行衛を何と尋ぬらん

聞くやいかにゆゆの空なる風だにも。 「松に音する習ひあり

「真葛が原の露の世に。 「身を恨みてや明け暮れん。 「是ゆ都北

白河に年経てすめる女なるが思ひさる外に一人子を人商人にさ

そつれて行衛をきけば逢坂の關の東の國遠きあづまとかやに下

りぬと聞くより心亂れつゝそなたとばかり思ひ子の跡を尋ねて

迷ふなり。 千里を行も親心子を忘れぬと聞くものを。 本よ

りも契假なる一つ世の。 其中をだに添ひもせて爰やかしこ

に親と子の四鳥の別れこれなれや尋ぬる心のはてやらん武藏の

國と下總の中にある角田川にも着にけり。 「のうく我

をも舟にのせて給ひりけへワキ 「おことゆいづくよりいづ方へ下

る人ぞ女 「是ゆ都より人を尋ねて下る者にてけワキ 「都の人と云

ひ狂人といひ面白う狂うて見せけへ女 狂はずゆ此舟にゆのせまじ

いぞとよ女 「うたてやな角田川の渡し守ならば日も暮れぬ舟に

のれとこそ承るべけれかたの如くも都の者を舟にのるなと承る上

ゆ角田川の渡し守とも覚えぬ事な宣ひそよワキ 「げにぐ都の人

とて名にしおひたるやさしさよ女 「のう其言葉ゆこなたも耳に

とまるものをかの業平も此渡りにて名にしおひばいざ事問ゆん上

都鳥我思ふ人ゆありやなしやとのう舟人あれに白き鳥の見えた

るゆ都にてゆ見馴れぬ鳥なりあれをば何と申けぞワキ 「あれこそ

沖の鷗ゆよ女 「うたてやな浦にてゆ千鳥ともいへ鷗ともいへな

ど此角田川にて白き鳥をば都鳥とゆ答へ給ゆぬ上 「げにぐ誤

り申たり名所にゆ住めども心なくて都鳥とゆ答へ申さで女 「沖

の鷗と夕浪のワキ 「昔にかへる業平も女 「ありやなしやと言問ひ

しも 「都の人を思ひ妻女 「わらゆも東に思ひ子のゆくへをと

ふゆ同じ心の 「妻をしのび女 「子を尋ぬるもワキ 「思ひゆ同じ

角田川

三

(三六)

女メノススノノ一一

同上

戀路コイミチなれば \*我ワガも亦モいさ言問コトヲん都鳥トウトリ 我思ワガオモひ子コの東路トウミチに。

ありやなしやと問へども 答へぬうたて都鳥トウトリ鄙ノボの鳥トリとや

(舟歌)

いひてましげにや舟フネぎほふ堀江ウツリの川カハの水際ミヅノヘに來居キつ、なくの都

鳥トリそれの難波江ナニハ是コト又角田川ツノノカハの東ヒガシまで思オモへば限リミなく遠トホくも來キぬ

るものかなさりとての渡守舟ワタシヅネこそりてせばくともものせさせ給へ

渡し守ヲさりとてののせてたび給へ \*かゝるやさしき狂女クラメこそ

ひぬれ急イサいで舟フネにのりひへ此渡りココの大事オホニセの渡りワタリにてひかまひて

靜シズカに召メされひへ 男オトコ 「のうあの向ムカひの柳ヤナギの本ノに人の多く集りてひ

の何事ナニカにてひぞ 「さんひあれの大念佛オホニホトにてひそれにつきて哀アハレ

なる物語モノガタリのひ此舟ココの向ムカひへ着ツきひぬん程ほどに語カつて聞キかせ申マウさう

ずるにてひ扱ツも去年オトシ三月サン十五日イチニチしかも今日コンニチに相ア當タりてひ人ヒト商人シヤウジン

の都ミヤコより年の程ほど十二三ジュニサンばかりなる幼コき者モノを買取カつて奥ウラへ下りひ

が此幼ココき者モノ未マだ習ナぬ旅ツのつかれにや以もつつての外ソノトに違例チガヒし今イマの

一足ヒトツボもひかれずとて此川岸コノカハにひれふしひをなんぼう世ヨに情ナな

き者のひぞ此幼ココき者モノをば其ソノまゝ路次ロジに捨スて商人シヤウジンの奥ウラへ下くだつてひ

さる間マこの邊ヘリの人々ヒト此幼ココき者モノの姿シを見ミひに由よしありげに見えひ程

(三六)

さる間マこの邊ヘリの人々ヒト此幼ココき者モノの姿シを見ミひに由よしありげに見えひ程

角田川

四

に様々に痛めりてゆへ共前世の事にてもやゆひげん。たんだ弱りに弱り既に末期と見えし時。おことゆいづくいかなる人ぞと。父の名字をも國をも尋てゆへば。我の都北白河に吉田の何某と申し人の唯ひとり子にてゆが。父にゆおくれ母ばかりにそひ参らせゆひしを。人商人にかどめされて。かやうに成行きゆ。都の人の足手影もなつかしうゆへば。此道の邊につきこめて。験に柳を植ゑて給ゆれとおとなしやかに申し。念佛四五返唱へつひにこと終つてゆ。なんぼう哀なる物語にてゆぞ。見申せば船中にも少々都の人御座ありげにゆ。逆縁ながら念佛を御申しゆひて。御弔ひゆへ。よしなき長物語に舟が着いてゆ。とうく御あがりゆへ。いかさま今日の此所に逗留仕ゆひて。逆縁ながら念佛を申さうずるにてゆ。いかに是なる狂女。何とて舟よりゆおりぬぞ急いで。あがりゆへ。あやさしや。今の物語を聞きゆひて。落涙しゆよ。のう急いで舟よりあがりゆへ。一のう舟人今の物語ゆ。いつの事にてゆぞ。去年三月今日の事にてゆ。一扱其兒の年ゆ。十二歳。一主の名ゆ。梅若丸。父の名字ゆ。吉田の何某。一扱其後の親とても尋

りげにゆ。逆縁ながら念佛を御申しゆひて。御弔ひゆへ。よしなき長物語に舟が着いてゆ。とうく御あがりゆへ。いかさま今日の此所に逗留仕ゆひて。逆縁ながら念佛を申さうずるにてゆ。いかに。是なる狂女。何とて舟よりゆおりぬぞ急いで。あがりゆへ。あやさしや。今の物語を聞きゆひて。落涙しゆよ。のう急いで舟よりあがりゆへ。一のう舟人今の物語ゆ。いつの事にてゆぞ。去年三月今日の事にてゆ。一扱其兒の年ゆ。十二歳。一主の名ゆ。梅若丸。父の名字ゆ。吉田の何某。一扱其後の親とても尋

ワキ

ねず 「親類とても尋ねこず」  
女女上 「まして母とても尋ねぬよのう

「思ひもよらぬ事」  
「のう親類とても親とても尋ねぬこそ理りな

れ其幼き者こそ此物狂が尋ぬる子にてゆひへとよのう是の夢か

やあら浅ましやゆ 「言語道断の事にてゆいものかな今迄のよそ

の事とこそ存じてゆへ扱の御身の子にてゆひけるぞやあら痛の

しやゆ彼人の墓所を見せ申ゆべし此方へ御出でゆへ 「今迄の

さりとも逢ゆんを頼みにこそ知らぬ東に下りたるに今この世に

なき跡の験ばかりを見る事よ扱もむさんや死の縁として生所を去

上座

既既に月月いて川風川風もはや更更け過過ぐる夜念佛夜念佛の時節の時節なればと面々に

きゆひてもかひなき事たゞ念佛を御申ゆひて後世を御弔ゆへ

定定の雲おほへりげに目の前の浮世目の前の浮世かなかな 「今何と御歎

世世の習習ひ人間憂人間憂ひの花盛花盛無常無常の嵐音嵐音をひ生死生死長夜長夜の月の影不

くてあるゆかひなき帯木帯木の見えつ隠れつ面影面影の定めなき

此世此世の姿を母に見せさせ給へや残りてもかひ有有べきゆ空し

此下此下にこそあるらめや同下 さりとてゆ人々人々此土此土を返して今一度

つて東のはての道の邊りの土となりて春の草のみ生生ひ茂りたる



鉦鼓をならしすむれば 母の餘りの悲しさに念佛をさへ申さずして唯ひれふして泣き居たり 「うたてやな餘の人多くま

しますとも母の弔ひ給めんをこそ亡者も喜び給ふべけれと鉦鼓を母に参らすれば 我子のためと聞けばげに此身も鳧鐘を取りあげて 「歎きをとめ聲すむや 月の夜念佛もろともに

心の西へと一筋に 南無や西方極樂世界三十六萬億同號同名阿彌陀佛 南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

陀佛 角田河原の波風も聲たてそへて 南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

阿彌陀佛南無阿彌陀佛 名にしおのば都鳥も音をそへて 南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

のうちにまさしく我子の聲の聞えひ此塚の中にてありげにひよ 我らもさやうに聞きてひ所詮此方の念佛をば留めひべし母御一

人御申ひへ 今一聲こそ聞かまほしけれ南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛 聲の中よりまぼろしに見えけれ

ば あれの我子か 母にてましますかと 互に手に手を 取りかたせば又きえくとなりゆけばいよく思ひぬます鏡面

角田川

影もまぼろしも見えつ隠れつする程に東雲の空もほのぐと明  
けゆけば跡絶えて我子と見えし夕塚の上の草茫々として唯しる  
しばかりの浅茅が原なるこそ哀なりけれ

雲 林 院

二月

前シテ 老 翁  
ワキ 公 光

後シテ 在原 兼平

藤咲く松も紫のく雲の林を尋ねん 是の津の國蘆屋の里

に公光と申す者にては我幼かりし頃よりも伊勢物語を手馴れ處

に或夜ふしぎなる靈夢を蒙ては程に唯今都に上らばやと存け

花の新に開くる日初陽潤へり鳥の老いて歸る時薄暮くもれる春

の夜の月の都に急ぐなり 蘆屋の里を立出て我の東に赴けば

名残の月の西の海汐の蛭子の浦遠しく 松蔭に煙をかづ

く尼が崎く暮て見えたる漁火のあたりをとへば難波津に咲



「花も惜きと」  
 「いひつべし」  
 げに枝を惜むゆ又春のため手折  
 の見ぬ人のため惜むも乞も情あり二つの色の争ひ柳櫻をこさま  
 せて都ぞ春の錦なるく  
 「いかに旅人御身の何方より來り  
 給ふぞ」

「是の津の國昔屋の里に公光と申す者にてひが我幼か  
 りし頃よりも伊勢物語を手馴れ處にある夜の夢にとある花の蔭  
 よりも紅の袴めされたる女性束帯給へる男伊勢物語の草紙を持  
 ち佇み給ふをあたりによりつる翁にとへばあれこそ伊勢物語の  
 根本在中將業平女性の二條の後所都北山蔭紫の雲の林と語る

と見て夢覺ぬ餘りにあらたなる事にてひ程に是まで参りてひ  
 「扱の御身の心を感じつゝ伊勢物語を授けんとなり今宵の爰に臥給  
 ひ別れし夢を待ち給へ」  
 「嬉しやさらば木の本に袖をかたしき  
 臥て見ん」  
 「其花衣を重ねつゝまた寝の夢を待ち給ふばなとか  
 験のなかるべき」  
 「かやうに委しく教へ給ふ御身いかなる人  
 やらん」  
 「其様年の古びやう昔男となど知らぬ」  
 「扱の業平に  
 てましますか」  
 「いや」  
 我名を何と夕ばへのく花をし思  
 ふ心のへ木隠の月に顯れぬ眞に昔を戀衣一枝の花の蔭にねて我



賊色の狩衣の袂を冠の巾子にうちかづき忍び出るや二月の黄昏  
 月も早入りていと朧夜に降の春雨か落るの涙かと袖打拂ひ裾  
 をとりしをくすくすとたどりくも迷ひゆく  
 「思ひ出た  
 り夜遊の曲」返す真袖を月や知る  
 夜遊の舞樂も時移れば  
 名残の月も山藍の羽袖返すや夢のつげの枕此物語語る共  
 「松の葉の散り失せず」末の世までも情知る言の  
 葉草のかりそめにかくあらゆせる古への伊勢物語かたる夜もす  
 がら覺むる夢と成にけりや覺むる夢となりにけり

五番目 略協能

春日龍神

二月

前シテ宮守  
ワキ明惠上人

後シテ龍神

大次第  
ヨハクキ

月の行衛もそなたごとく日の入る國を尋ねん  
 尾の明惠法師にてい我入唐渡天の志あるにより御暇乞の爲に春

是の梅の

打上

日の明神に參らばやと思ひ唯今南都に下向仕りひ  
 愛宕山楯  
 が原をよそに見て月ツヨクに雙の岡の松緑の空も長閑なる都の  
 山を跡に見て是も南の都路や奈良坂越えて三笠山春日の里に着  
 にけり晴れたる空に向へば和光の光あらたなり  
 夫山の動ざる形を現じて古今に至る神道を顯し里の平安のちま

春日龍神

たを見せて人間長久の聲満てりまことに御名も久堅の天の兒屋  
根の世々とかや 月にたつ影も鳥居の二柱 御社の誓ひも  
さぞな四所の 神の代よりの末うけてすめる水屋の御影ま  
で塵に交ゆる神心三笠の森の松風も枝を鳴さぬ氣色かな

「いかに是なる御奴に申へき事のい や是の柵の尾の明惠上人

にて御座ひぞや唯今の御參詣さこそ神慮に嬉しく思召しひらん

「さんひ唯今參詣申す事餘の儀にあらず我入唐渡天の志あるによ

り御暇乞の爲に只今參りてい 「是の仰にていへ共さすがに上

人の御事の年始より四季折々の御參詣の時節の少し遅速をだに  
待ちかね給ふ神慮ぞかしされば上人をば太郎と名づけ笠置の解  
脱上人をば次郎と頼み双の眼兩の手の如くにて晝夜客參の擁護  
懇なるところ承りていに日本を去り入唐渡天し給ひん事いかで  
神慮に叶ふべき唯思召しとまり給へ 「げにぐ仰のさる事な  
れ共入唐渡天の志も佛跡を拜まん爲なれば何か神慮に背くべき  
「是又仰とも覺えぬ物かな佛在世の時ならばこそ見聞の益もある  
べけれ今の春日の御山こそ即ち靈鷲山なるべけれ其うへ上人初

たを見せて人間長久の聲満てりまことに御名も久堅の天の兒屋  
 根の世々とかやウ下歌 月にたつ影も鳥居の二柱上歌 御社の誓ひも  
 さぞな四所の神の代よりの末うけてすめる水屋の御影ま  
 で塵に交ゆる神心三笠の森の松風も枝を鳴さぬ氣色かなワキ

「いかに是なる御奴に申べき事のいシテ 「や、是の柵の尾の明惠上人  
 にて御座ひぞや唯今の御參詣さこそ神慮に嬉しく思召しひらん  
ワキ 「さんひ唯今參詣申す事餘の儀にあらず我入唐渡天の志あるによ  
 り御暇乞の爲に只今參りていシテ 「是の仰にていへ共さすがに上

人の御事の年始より四季折々の御參詣の時節の少し遅速をだに、  
 待ちかれ給ふ神慮ぞかし。されば上人をば太郎と名づけ笠置の解  
 脫上人をば次郎と頼み双の眼兩の手の如くにて晝夜客參の擁護  
 懇なるところ承りていに日本を去り入唐渡天し給ゆん事いかて  
 神慮に叶ふべき唯思召しとまり給へワキ 「げにぐく仰のさる事な  
 れ共。入唐渡天の志も佛跡を拜まん爲なれば何か神慮に背くべき  
 「是又仰とも覺えぬ物かな佛在世の時ならばこそ見聞の益もある  
 べけれ。今の春日の御山こそ即ち靈鷲山なるべけれ。其うへ上人初



參の御時奈良坂の此手を合せて禮拜する人間申すに及ばず心  
 なき 上歌同 三笠の森の草木の 風も吹かぬに枝をたれ春日山  
 野邊に朝立鹿までも皆悉く出向ひ膝を折り角をかたむけ上人を  
 禮拜するかほどの奇特を見ながらも眞の浄土のいづくぞと問ふ  
 武藏野のはてしな心や唯返すぐ我頼む神のまに 留り  
 て神慮をあがめおのしませ 猶々當社の御事委しく御  
 物語りゆへ 然るに入唐渡天といつば佛法流布の名をとめし  
 古跡を尋ねんためぞかし天台を拜むべく比叡山に參るべし

五臺山の望みあらば吉野筑波を拜すべし 昔の靈鷲山 今  
 衆生を度せんとして大明神と示現し此山に宮居し給へば 即ち  
 鷲の御山とも 春日のお山を拜むべし 我を知れ釋迦牟尼佛  
 世に出てさやけき月の世を照らすと今の御神詠もあらたなり然  
 れば誓ひある慈悲萬行の神徳の迷ひを照らす故なれや小機の衆  
 生の益なきを悲み給ふ御姿瓔珞細軟の衣を脱ぎ鹿弊の散衣を着  
 しつゝ四たいの御法を説給ひし鹿野苑も爰なれや春日野に起き  
 臥すの鹿の苑ならずや 其外當社のありさまの 山の三笠に

春日龍神

陰さすやける日そなたに顯れて誓ひを四方に春日野の宮路も末  
あるや曇りなき西の大寺月すみて光ぞ増る七大寺御法の花も八  
重櫻の都とて春日野の春こそそのどけかりけれ げに有難き御  
事かな即ち是を御神託と思ひ定めて此度の入唐をば思ひとまる  
べし扱々御身ゆいかなる人ぞ御名をなのり給ふべし 入唐渡  
天をとまり給ゆば三笠の山に五天竺をうつし摩耶の誕生伽耶  
の成道鷲峯の説法 雙林の入滅まで悉く見せ奉るべし暫く爰  
に待ち給へと木綿四手の神の告我の時風秀行ぞとてかきけすや

うに失にけり 神託正にあらたなる 聲の内より  
光さし春日の野山金色の世界となりて草も木も佛體となるぞふ  
しきなる 時に大地震動するの下界の龍神の參會か  
「すの八大龍王よ」 「難陀龍王」 「跋難陀龍王」 「娑伽羅龍王」  
「和脩吉龍王」 「德又迦龍王」 「阿那婆達多龍王」 百千眷屬引  
きつれひきつれ平地に波瀾をたて、佛の會座に出來して御法を  
聽聞する 「其外妙法緊那羅王」 「又持法緊那羅王」 「樂乾闥  
婆王」 「樂音乾闥婆王」 「婆稚阿脩羅王」 「羅喉阿脩羅王の恒  
春日龍神

沙の眷屬引つれく是も同じく座列せり同上龍女が立舞ふ波瀾  
 の袖く白妙なれや和田の原の拂ふ白玉立つの緑の空色も  
 映る海原や沖行くばかり月の御舟のさほの川づらに浮み出れば  
佐保川 あり 八大龍王八大龍王はより 八大龍王の八つの冠を傾け所々春日野の月の三笠の  
シテ下 雲に上り飛火の野守もいで見よや摩耶の誕生鷲峯の説法双林  
 の入滅悉く終て是までなりや明惠上人扱入唐の「とまるべし  
 「渡天のいかに」 「渡るまじや」 「偕佛跡の」 「尋ぬまじや」 「尋  
 ねても」 此上嵐の雲に乗て龍女の南方に飛去りゆけば龍神

の猿澤の池の青波蹴立てりたて、其丈千尋の大蛇となつて天に  
 むらがり地に蟠りて池水をかへして失にけり

五番目  
略二番

船

橋

三月

ワツシ  
キレヲ  
山

伏女男

ツ大ワ  
ヨク男キ

山また山の行末や

雲路のしるべなるらん

是の三熊野

より出たる客僧にては我未だ松島平泉を見ずは程に此春思ひ立

松島平泉へと急ぎは幾瀬渡りの野洲の川彼織女の契り

まつ年に一夜のあだ夢の醒が井の宿をすぎ膽吹嵐の音にのみ月

の霞むや美濃尾張老を知れとの心かな急ぎは間是の

や上野の國佐野と申す所に着ては此所にて宿をからばやと存は

(七五六)

一七  
一七  
一七

法による道ぞと作る船橋の後の世かくる頼みかな

往事渺茫

として何事も見残す夢のうき橋に。猶數そへて舟競ふ堀江の川  
 の水際によるべ定めぬあだ波の浮世に歸る六つの道遁れかね  
 たる心かな。戀しき物を古への跡はるごとくと思ひやる。前の  
 世の報いの儘に生れきて。心にかげばとても身の生死の海  
 を渡るべき船橋を造らばや二河の流れありながら科の十の道  
 多し眞の橋を渡さばやく。いかに客僧橋の勧めに入りて御  
 通りゆへ。見申せば俗躰の身として橋興立の志返すぐもやさ  
 しうこそゆへ。是の仰せとも覺えぬ物かな必ず出家にあらねば

とて志のあるまじきにてもゆゆず先勧めに入りて御通りゆへ

「勧めにゆ参りゆべし。扱此橋ゆいつの御宇より渡されたる橋にて

ゆぞ「萬葉集の歌に東路の佐野の船橋とりはなしと詠める歌の

心をばしろしめしゆゆずや。いやさやうに申せば恥かしや身

の古へも淺間山。こがれ沈みし此河のさのみゆ申さじさなき

だに苦しみ多き三瀬川に浮かむ便りの船橋を渡してたばせ給へ

とよ。げにぐ親し離くれげの物語さてゆふりにし船橋の主

を助けん其ためか。殊更是ゆ山伏の橋をば渡し給ふべし

船橋

二

ワキ「そも山伏の身なればとて取分き橋を渡すべきか」  
シテ「さのみな争

女<sup>ウラナ</sup>「ひ給ひそとよ役の優婆塞葛城や祈りし久米路の橋のいかに

「たとふべき身にあられ共我も女の葛城の神」  
シテ「一言葉にて止ま

じや唯幾度も岩橋のッヨクなど御心にかけて給ひぬ。さりながらよ

そにて聞くも葛城や夜作るなる岩橋ならば渡らん事も難かるべ

し。是の長き春の日の長閑けき水の船橋にさして柱もいるま

じや徒に朽果てんを作り給へ山伏。所々同じ名のく。佐野

の渡りの夕暮に袖うち拂ひてお通りあるか篠懸の頭も春なり河

樂小話

風の花吹き渡せ船橋の法にゆき、の道作り給へ山伏峯々廻り給  
ふ共渡りを通らでゆいづくへ行かせ給ふべき。扱々萬葉集の

歌に東路の佐野の船橋とりはなし。又鳥の無しと二流によまれた

るゆ。何と申たる謂にてゆぞ。さんゆそれについて物語のゆ語て

聞かせ申ひべし昔此所に住みける者忍び妻にあこがれ所々川を

隔てたれば此船橋を道としてよなく通ひけるに二親此事を深

くいとひ橋の板を取放すそれをば夢にも知らずしてかけて頼み

し橋の上よりかつばと落ちて空しくなる妄執といひ因果といひ。

船橋

三

其まゝ三途に沈みはて、紅蓮大紅蓮の氷に閉られて  
 世もなき苦みの海こそあらめ河橋や磐石におされ苦を受くる  
 さらば沈みも果てずして魂の身を責むる心の鬼となり變りな  
 ほ戀草の事しげく邪姪の思ひにこがれゆく船橋も古き物語眞  
 の身の上なり我跡とひてたび給へ 一夕日漸く傾きて霞の空  
 もかきくらし雲となり雨となる中有の道も近づくか橋と見えし  
 も中絶ぬ爰のまさしく東路の佐野の船橋鳥なし鐘こそ響け夕  
 暮の空も別に波にけりく  
 待 古にし跡をあらためてく

三寶加持の行ひに五道の罪も消ぬべき法の力ぞ有難き  
 いかに行者ありがたや徒に三途に沈みし身なれ共法の力が船橋  
 の浮かむ身となる有難さよ いかに行者我の猶し此妄執の故  
 により浮みかねたる橋柱の重き苦患を見せ申さん泣く涙雨とふ  
 らなん渡川水まさりなば歸りくるかに 返れや返れあだ波の  
 「柱を頂く磐石の苦患」これく見給へ淺ましや 見我身者  
 發菩提の功力を受けていふならく奈落の底の水層となりしを知  
 我心者即身成佛ありがたや打上痛のしや未だ邪姪の業ふかき其

船橋

四

執心を振捨て、猶々昔を懺悔し給へ。「何事も懺悔に罪の雲消て、  
 眞如の月も出つべし。」「五障の霞の晴がたき春の夜の一時胡蝶  
 の夢のためむれにいでぐ姿を見え申さん。」よしや吉野の山  
 ならねど是も妹背の中川の。「橋のとだえのありけるとめいさ

白波の夜ごとに「通ひ馴たる浮船の」「共にこがる、思ひ妻、

背々に通ひ馴たる船橋のさえ渡る夜の月も半に更しづまりて

「人もれにふし丑みつ寒き河風もいとめじ逢瀬の向ひの岸に見え  
 たる人影ゆそれか心嬉しや頼もしや。」互にそれぞと見見えし

中の橋を隔て、立來る波のよりばの橋かかさぎの行き  
 あひのま近くなりゆくま、にはなせる板間を踏みはづしかつば  
 と落ちて沈みけり。「東路の佐野の舟橋取はなし親し離くれは、  
 妹に逢ぬかかも、執心の鬼となつて、共に三途の川橋の  
 橋柱に立てられて悪龍の氣色にかわり程なく生死娑婆の妄執邪  
 姪の悪鬼となつて我と身を責め苦患に沈むを行者の法味功力に  
 より眞如發心の玉橋の眞如發心の玉橋のうかめる身とぞなりに  
 ける。」





とゆゑなだの事にてゆか何事にてゆぞ  
女上  
「我石山に籠り源氏六

十帖を書きしるしなき跡迄の筆のすさみ名の形見とゆなりたれ  
どもかの源氏に終に供養をせざりし科により浮かむ事なくさむ  
らへば然るべくゆ石山にて源氏の供養をのべ我跡とひてたび給  
へと此事申さんとして是迄参てゆ  
「是ゆ思ひもよらぬ事を承り

ひものかなさりながら易き間の事供養をばのべゆべし扱誰と志  
して廻向申ゆべき  
女  
「先石山に参りつゝ源氏の供養をのべ給ゆ

ば其時我も顯れてともに源氏を弔ふべし  
「嬉しやそれこそ奇

特なれいて源氏を書きしゆ  
「恥かしや此身の浮世の土となれ

ども  
「名をば埋まぬ苦の下  
「石山寺に立つ雲の  
「紫式部

にてましますな  
「恥かしや色に出るか紫の  
雲も其方が

夕日影さしてそれ共名のりえずかき消すやうに失にけり

中入  
「扱石山に参りつゝ念願をつとめ事終り夜も更け方の鐘の聲心も

澄めるをりふしに  
「ありつる源氏の物語眞しからぬ事なれ共

「供養をのべて紫式部の  
「菩提を深く  
「とふべきなり

ゆ思へ共あだし世の  
夢にうつるふ紫の色ある花も一時の

源氏供養

あだにも消えし古への光源氏の物語聞くにつけても其まこと頼  
 み少なき心かな後シテ上ニ「松風も散れば形見となる物を思ひし  
 山の下紅葉」名も紫の色に出て「見えん姿はづかしや  
 「かくて夜も深更になり鳥の聲おさまり心すこき折節燈火の陰を  
 見ればさもうつくしき女性紫のうす衣のそばをとり影の如くに  
 見え給ふの夢か現かおぼつかな女「うつろひ易き花色のかされ  
 の衣の下こがれ紫の色こそ見えぬ枯野の萩本のあらまし未通ら  
 ば名のらずとしろしめされずや」紫の色にの出すとあらまし

の言葉の末と心得ぬ紫式部にてましますか「恥かしながら  
 我姿」其面影のきのふみし「姿に今も變らねば」互に心  
 を「おきもせず」同上「ねもせであかす此夜の月も心せよ石山  
 寺の鐘の聲夢をも誘ふ風の前消しゆそれか燈火の光源氏の跡と  
 はん」女下「あら有難の御事や何をか布施に参らせしへき  
 「いや布施など、ゆ思ひもよらずゆ迎も此世の夢のうち昔に返す  
 舞の袖唯今舞ふて見せ給へ」恥かしながらさりとての仰せを  
 ばいかで背くべきいてくさらば舞ゆんとて」もとより其名

源氏供養

も紫の「色珍らしきうす衣の」日もくれなぬの扇を持ち

「恥かしながら弱々と」あわれ胡蝶の「ひと遊び」夢のう

ちなる舞の袖「現に返すよしもがな」花染衣の色がさね

「紫匂ふ袂かないろへ夫無常といつば目の前なれ共像もなし」一生

夢の如し誰あつて百年を送る槿花一日唯同じ「爰に數ならぬ

紫式部頼みをかけて石山寺悲願を頼み籠り居て此物語を筆にま

かす「され共終に供養をせざりし科により安執の雲も晴難し

今逢難き縁に向て心中の所願を起し一つの巻物に寫し無明の

眠をさます南無や光源氏の幽霊成等正覺 抑も桐壺の夕の煙

速かに法性の空に至り箒木の夜の言の葉の終に覺樹の花散りぬ

空蟬の空しき此世をいとひて夕顔の露の命を觀し若紫の雲の

むかへ末摘花の臺に座せば紅葉の賀の秋の落葉もよしやたた

まく佛意にあひながら榊葉のさして往生を願ふべし「花ら

る里にすむととも 愛別離苦の理りまぬかれがたき道とかや唯

すべからく生死流浪の須磨の浦を出て四智圓明のあかしの浦

にみをつくしいつまでもありなん唯蓬生の宿ながら菩提の道を

(明石) (浮城)

源氏供養

願ふべし松風の吹くとても業障のうす雲の晴る、事更になし秋  
 の風消えずして紫磨忍辱の藤袴上品蓮臺に心を懸て誠ある七寶  
 莊嚴のまき柱のもとにゆかん梅が枝の匂ひにうつる我心藤の裏  
 葉におく露の其玉蔓かけしはし朝顔の光頼まれず、朝に梅  
 檀の陰にやどり木名も高さ、つかさ位を東屋の内にこめて樂し  
 み榮えを浮舟にたとふべしとかや是も蜻蛉の身なるべし夢の浮  
 橋を打渡り身の來迎を願ふべし南無や西方彌陀如來狂言綺語を  
 振り捨て紫式部が後の世を助け給へともろともに鐘うちなら

して廻向も既に終りぬ、げに面白や舞人の名残今となく鳥  
 の夢をも返す袂かな、光源氏の御跡を弔ふ法の力にて我も生れ  
 ん蓮の花の宴の頼もしや、げにや朝の秋の光、夕に影も  
 なし、朝顔の露電の影いづれかあだならぬ定めなの浮世や  
 よくく物を案ずるに、紫式部と申ゆかの石山の觀世音が  
 りに此世にあらわれか、源氏の物語是も思へば夢の世と人  
 に知らせん御方便げにありがたき誓ひかな思へば夢の浮橋も夢  
 のあひだの言葉なり、

源氏供養

四番目  
略三番

花

筐

九月

ワツシテ照日  
ワキツレ(男)御  
使女前

于方天  
ワキ供奉官人  
皇(詔なし)

男前

「是の越前國味真野と申所に御座ゆ男大迹の皇子に仕へ申者にて  
 け扱も都より御使あつて武烈天皇の御代を味真野の皇子に御ゆ  
 づりあり御迎ひの人々まかり下り御供申し今朝とく御上洛にて  
 けさる間此程御寵愛あつて召しつかひれてけ照日の前と申御方、  
 此程御暇にて御里に御座ゆかの御方へ俄の御上洛につき御玉  
 章と朝毎に御手に馴し御花筐を参らせられけを某に持て参れと  
 の御事にてけ程に唯今照日の御里へと急ぎけあら嬉しや是へ御

出ひよ是にて申ひべしいかに申ひシテ女 「何事にていぞ男」我君の

都より御迎ひくだり御位に即かせ給ひ今朝とく御上りにてい。又

是なる御文と御花筐とを慥に参らせよとの御事にてい。これく

御覽いへ女 「扱の我君御位につかせ給ひ都への御上り返すく

も御めでたうこそいへとよさりながら此年月の御名残いつの世

にかの忘るべきあら御名残をしやされ共思召し忘れずして御玉

章を残し置かせ給ふ事の有難さよ急ぎ見まぬらせいゆん我應神

天皇の孫苗をつぎながら帝位をふむ身にあらされ共天照太神の

神孫なれば毎日に伊勢を拜し奉りし其神感の至りにや群臣の撰  
みに出だされていざなわれゆく雲の上廻りあふべき月影をあ  
の頼みに残すなり頼めた袖ふれ馴し月影の暫し雲井にへだて  
ありともと 書き置き給ふ水莖の跡に残るぞ悲しき 君と住  
む程だにありし山里に 獨残りて有明のつれなき春も杉間  
ふく松の嵐もいつしかに花の跡とてなつかしき御花筐玉章をい  
だきて里に歸りけり 君の恵みも高照らす 紅葉  
の御幸早めん 一かたしけなくも此君の應神天皇五世の御末男

花

二

(〇入カ)

大迹の皇子と申しが當年御即位おさまりて、繼體天皇と申すなり  
 「されば治まる御代の御影日の本の名もあひにあふ」 大和國や  
 玉穂の都に 「今宮造り」 「あらたなり」 立上 萬代の恵みも久し  
 富み草の種もさかゆく秋の空露も時雨も時めきて四方に  
 色添ふ初紅葉松も千歳の緑にて常磐の秋にめぐりあふ御幸の車  
 早めん いかにあれなる旅人都への道教へてたへ何物  
 狂とや物狂も思ふ心のあればこそとへなど情なく教へ給ゆぬぞ  
 や 「よしのう人の教へずとも都への道しるべこそいへあれ御

(チ入カ)

覽ゆへ雁の渡りゆ 「何雁の渡るとやげに今思ひ出したり秋に  
 ついとも雁の南へわたる天つ空 「空ごとあらじ君がすむ都と  
 やらんもそなたなれば 「聲をしるべの便の友と 「我也田の  
 面の雁こそつれて越路のしるべなれ 「其上名におふ蘇武が旅  
 雁 「玉章をつけし南の都路に 「我をも共につれてゆけ  
 宿かりがれの旅衣 「飛立つばかりの心かな 打上君がすむ越の  
 白山しられ共ゆきてや見まし足曳の 大和のいづく白雲の高間  
 の山のよそにのみ見てや止みなん及びなき雲井のいづく御影山



日の本なれや大和なる玉穗の都に急ぐなり  
 爰の近江の湖な  
 れやみづからよしなくも及ばぬ戀にうき舟の  
 を忍ぶのすり衣  
 涙も色か黒髪のおかざりし別路の跡に心  
 のうかれきて鹿の起臥堪へかれて猶通ひゆく秋草の野暮れ山  
 暮れ露分て玉穗の宮に着にけり  
 時しも頃の長月やま  
 だき時雨の色うすき紅葉の御幸の道の邊に非形を戒め面々に御  
 幸の御先を清めけり  
 さなきだに都になれぬ鄙人の女といひ  
 狂人といひ  
 さこそ心の檜の葉の風も亂る、露霜の御幸の先に

進みけり  
 ふしぎやな其のさま人に變りたる狂女と見えて見  
 苦しやとて官人立より拂ひけり  
 このきけへ  
 何と君の御花筐をうち  
 の御花筐をうち落されてけり  
 何と君の御花筐をうち  
 落されたとやあらいまのしの事や  
 いかに狂女持たる花  
 籠を君の御花筐とて渴仰するゆ  
 君とゆたが事を申すぞ  
 事新しき問事哉  
 此君ならで日の本にまた異君のましますべきか  
 我らの女の狂人なればしらすと思召さる、かかたじけなくも此  
 君の應神天皇五世の御孫過し頃まで北國の味真野と申山里に

花 籠

四

「勇大迹の皇子と申しが」今の此國玉穗の都に「繼躰の君と申と  
 かや」さればか程にめでたき君の「御花筐を恐れもなさて」  
 ち落し給ふ人々こそ我よりも猶物ぐるひよ 恐ろしや  
 世の末世に及ぶといへど日月の地に落ちずまた散りもせぬ花筐  
 をあらしなやあらかねの土に落し給ゆば天のとがめも忽ちに罰  
 あたり給ひてわがごとくなる狂氣して友の物狂ひといわれさせ  
 給ふな人にいわれさせ給ふな「かやうに申せば」  
 なき花筐のかごととやおぼすらん此君未だ其頃の皇子の御身な

れど朝毎の御勤めに花を手向け禮拜し南無や天照皇太神宮天長  
 地久と稱へさせ給ひつゝ御手を合させ給ひし御面影の身にそひ  
 て忘れ形見までもおなつかしや戀しや「陸奥の浅香の沼の花  
 がつみ 且みし人を戀草の忍ぶもちすり誰ゆるぞ亂心の君のた  
 め爰に来てだに隔ある月の都の名のみして袖にもうつされず又  
 手にもとられず唯徒に水の月を望む猿の如くにて叫びふして  
 泣き居たり」  
 ていかにも面白う狂ふて舞ひ遊びひへ勸覽あるべきとの御事に

花 陸

五

てあるぞ急いで狂ひひへシテ「嬉しや扱ひ及びなき御影を拜や申  
上カへきいざや狂ひん諸共にツテニ人「御幸に狂ふ囉こそ地ニ「御先を拂ふ  
終り迄袂なれ打上「忝なき御譬なれ共いかなれば漢王の李夫人の御別  
れを歎き給ひ朝政神さびて夜のおとも徒に唯思ひの涙御衣  
の袂をぬらす「又李夫人の紅色の花の粧ひ衰へてしほる  
露の床の上ちりの鏡の影を恥ぢて終に帝に見え給はずして去り  
給ふ帝深く歎かせ給ひつ其御形を甘泉殿の壁に寫し我も  
畫圖に立そひて明暮歎き給ひけりされ共なく御思ひのたまさ

れども物いひ交ひす事なきを深く歎き給へば李少と申す太子の  
いとけなくましますが父帝に奏し給ふやう「李夫人の本のこ  
れ仙界の色上界の嬖妾くわすいこの仙女なり一旦人間に生るとか  
申せ共終に本の仙宮に歸りぬ泰山府君に申さく李夫人の面影を  
しばらくこにまねくべしとて九花帳の中にして反魂香をたき  
給ふ夜ふけ人静まり風すさまじく月秋なるに夫かと思ふ面影の  
あるかなさかにかげろへば猶いやましの思ひ草葉末に結ぶ白露  
の手にもたまらで程もなく唯徒らに消ぬれば漂渺悠揚として花

花

六

又尋ねべき方なし。悲しさの餘りに李夫人の住なれし甘泉殿  
 を立去らず空しき床をうち拂ひ古き衾古き枕ひとり袂をかたし  
 く。宣旨にてあるぞ其花筐を参らせあげゆへ。餘りの事に  
 胸ふさがり心空なる花筐を恥かしながら参らす。帝の是を觀  
 覽あつて疑ひもなき田舎にて御手に馴し御花筐同じくとめ置  
 き給ひし御玉章の恨を忘れ狂氣をとめよ本の如く召し使ひん  
 との宣旨なり。げに有難や御惠み直なる御代に歸るしるしも。  
 思へば保ちし筐の徳。彼是ともに時にあふ。花の筐の名をとめ

「戀しき人の手馴し物を」かたみと名づけそめしこと

「此時よりぞ」始まりける。ありがたやかくばかり情のすゑ

を白露の恵みにもれぬ花筐の御かごとましまさぬ君の御心ぞあ  
 りがたき。御遊もすでに時過て。今の還幸なし奉らんと。  
 供奉の人々御車やりつづけもみち葉ちりとぶ御先を拂ひ拂ふや  
 袂も山風に誘われゆくや玉穗の都さそのれゆくや玉穗の都につ  
 きせぬ契りぞありがたき。